

---

# 最悪の時間割

M・M

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最悪の時間割

### 【Nコード】

N7824I

### 【作者名】

M・M

### 【あらすじ】

みんながいなければ何もできない

(メンバーの名前を少し変えました)

## 登場人物紹介

冥王小学校側

三堂一郎

この物語の主人公。冥王小学校の六年生、相当の秀才であり、ほとんどの生徒から慕われている。

鈴木今日子

一郎の友達。ひそかに一郎に思いを寄せているが、なかなか一郎に思いを伝えられない。

中島浩二

一郎の友達。一郎の友達の中で一番一郎と仲がいい。

奥村昭平

六年一組の生徒。特に一郎達と仲がいいわけではないが、一郎達と行動を共にする。

大崎東

一郎、今日子、浩二の担任。歳は三十代半ばあたりかと思われる。

進藤英助

冥王小学校校長。朝礼で自身の集めた珍しい品を生徒達に見せている。

鹿塚奈緒美

冥王小学校四年生。この若さで「金さえあれば何でもできると、思っているお嬢様。」

丹原供太

冥王小学校教師。今日子供を出産する妻がいる。

七瀬智子

冥王小学校三年生。しっかり者のお姉さん。

服部正

冥王小学校五年生。相当の運のよさを持つ。

SCY側

A

この事件を起こしたリーダー格の少年。使用武器は日本刀。

B

5・5の脅威的な視力を持つ少年。使用武器は拳銃。

C

今まで約三百人ほどの命を奪ってきた少女。使用武器はナイフ。

D

人をめった打ちにするのが何よりも好きな猟奇的な少女。使用武器はバット。

F

大人しく、優しい性格の少女。使用武器は弓矢。

K

性格、能力的にも嫌らしい少年。使用武器はヤリ。

L  
いつも携帯電話をいじっている少女。使用武器は大型ブーメラン。

P  
目の部分に機械のようなものが張り付いている少年。使用武器は斧。

X  
猫背で不気味な少年。使用武器は大型のハサミ。

a  
顔をゴムマスクで覆っている少女、そのマスクの下はあまりにも醜く、見た者は嘔吐や失神してしまうらしい。使用武器は日本刀。

b  
口調は穏やかだが、性格は残忍な少女。使用武器は拳銃。

e  
物を破壊するのが大好きな少年。使用武器は爆弾（手榴弾や地雷など）。

m  
ロープを使ったトラップ等を作るのが得意な少年。主な使用武器はワイヤー。

o  
k小4とy小4、U4と仲がいい少年。使用武器は超小型バズーカ。

u

人間のくせに人肉が好きな少女。使用武器は熊手。

k

まだ誰も殺した事のない少年。使用武器はヤリ（竹ヤリ）

y

k小4達と仲がいい少年。使用武器はパチンコ。

その他の登場人物

紫藤武

冥王小学校生徒の保護者。心の優しいお父さん。

杉下司場井

SAT第一部隊長。正義感あふれる隊長。

## ブローグ 合格発表

俺、三堂一郎は母さんと一緒に合格発表の掲示板の前に来ている。  
俺ほどがんばったヤツはいるだろうか？

この名門、冥王小学校に入るため、俺は相当の努力をしてきたのだ。毎日五時間以上は机に向かって勉強をして、普通の子供なら外でワイワイ騒いでいる土日も塾にいつて勉強したのだ。

来る日も来る日も勉強勉強…

俺の受験番号は324…俺と母さんはこの324の数字を掲示板からしらみつぶしに探した。

324…324…あった！

母さんが喜びのあまりか涙を流して俺に抱きついた。

俺の努力が報われた瞬間だった…

## 第一章 少年と金属製の箱

冥王小学校に入学して約六年…（2010年）俺は冥王小学校の六年生だ。

この学校に入学して俺はいろいろな事を学んだ。学習面はもちろんの事、俺はもっと大切な事を学んだ。

友達である。この学校に入る前は勉強勉強で、俺は友達というのがいなかった。いつも仲がいいという訳ではないが、やはり俺にとってかけがいのない一生の宝物だった。

卒業を間近に控えたそんなある日、俺は友達の中島浩二と鈴木今日子と一緒に中庭を散歩していた。

「もうすぐこの学校ともお別れか…」

浩二が寂しそうに言った。

「もう少し、この学校にいたかったが…月日が経つのは早いものだな」

「二人はもうどの中学校に行くか決めてるの？」

「もちろん冥王中学校さ、ほとんどのヤツがそこに行く」

俺達が俺達が歩いていると突然、今日子が足を止めた。

「どうした？」



俺達は今日子が見ている方を見た。

一人の少年が大きな金属製の箱を、針金で木にくくりつけていたのだ。

「何なってるんだろ？あの子…」

何だ？俺も少年のその不審な行動が気になったので、俺は本人に近づいて聞いた。

「お前こんな箱を木にくくりつけて何やってんだ？」

少年は俺の方をチラリと向いたが、すぐに作業に戻った。

「無視かよ…」

もういい。俺は二人に行こうと言って、中庭から出た。

「何してたんだろ、あの子…」

今日子が不安そうに少年の後ろ姿を見て言った。

俺達は教室に戻り、授業の準備に取り掛かったが、やはり俺もあの少年が何をしていたのか気になった。

放課後…

俺は一人で中庭へと向かった。

少年の姿こそは見えなかったものの、昼間少年がくりつけていた金属製の箱が木にくくりつけられていた。

俺はその箱を軽くたたいてみたが、カンカンという金属音がするだけで、何の変哲もない普通の金属製の箱だ。

すると突然肩をトントンと叩かれた。

「誰だ？」

俺はバツと振り向いた。そこには今日子が立っていた。

「なんだ…お前か…何だよ…」

今日子だった。

「三堂君…前から言おうと思ってたんだけど…」

またか…たしか四年生の時からコイツはたまに俺に対してこんなのだったっけ…

たまにこうやって放課後等に人の少ない所に呼び出されて、そして…

しばらく沈黙が流れたのち、今日子は口を開いた。

「ゴメン…やっぱりいいや」

そう言うと、今日子は小走りですって俺の前から消えた。

いつもいつも…一体何を俺に言いたいんだ？

「俺も…そろそろ帰るか…」

疑問を胸に残しつつも、俺は家に帰るため中庭から出て行った。

そう…あの木にくくりつけられた金属製の箱を残して…

## 第二章 朝礼

~~~~~ カチャ

「はあ…」

俺は目覚まし時計のアラームで目が覚めた。

俺は服を着替えると、いつも通りに一階に下りて朝食を食べに行った。朝食はすでに用意されており、ベーコンの香ばしい匂いが鼻に入ってくる。

「いただきます」

椅子に座り、手を合わせてそう言つと俺は焼きたてのパンに食らいついた。

「一郎」

パンを食べ終えた時、母さんが俺に近づいてきた。

「あなた宛に手紙が来ていますよ」

手紙？俺に手紙？珍しいな…

「ハイ、ありがとう」

母さんがいなくなると、俺は血の様に赤い蠟で閉じてある手紙の封を開けた。

手紙には文字は書いていなかった。代わりに黒のインクで描かれた不気味なマークが描かれていた。

黒い大きな点に、四本の黒い鳥の足のようなものが生えていた。

「ハッ」

俺は封筒ごと手紙をクシャクシャに丸めると、近くにあったゴミ箱に投げ入れた。昨日の少年と金属製の箱といい、今の変な手紙といい…今の世の中どうかしてる…！

「チッ」

俺はイライラしながらベーコンを口に入れると、味わう事なく丸呑みにした。

いつもとは少し遅れて俺は学校に着いた。

「遅いぞ三堂」

浩二が腕を組んだ状態で俺に言った。

「俺なんか十分前もにきたぜ」

「遅刻しなかったらいつきてもいいじゃないか」

「それもそうだな」

俺達は声を出して笑った。

「そつえば…」

浩二の顔から笑みが消え、途端に真剣な顔になった。

「今日の朝、俺宛てにこんなものが届いたんだが、お前の仕業じゃないよな？」

浩二がポケットから折りたたんだ紙切れを取り出して俺に向けて広げた。

「あつ…それは…」

朝、俺の家に届いたあのマークが描かれていた。コイツの所にも届いたのか…！

「お前…このマーク知っているのか？」

「ああ、俺の家にも来たよ」

「昨日のアイツと金属製の箱といい、手紙に入っていたこの変なマークといい…今の世の中どうかしてるぜ！」

俺が今日の朝に思っていた事を浩二も言ったので、俺は嘖出しそうになったが、なんとかこらえる事ができた。

「…もうすぐ朝礼が始まるから行くぞ…」

浩二はそう言って俺より先に教室から出た。

朝礼か…校長の無駄に長い話を聞かされるのか今日も…だが絶対に出なくてはならない。なにせ、もし出なかったら通知表はほとんど（頑張ろっ）になっってしまうからだ。

「行ってやるか…」

俺はそう呟くと、他の生徒の脇をすり抜けて、体育館へと向かった。

体育館に着いた頃にはほとんどの冥王小学校生徒が集まっていた。今日子もいる。

しばらくするとステージから校長が出てきた。校長は俺達に朝の挨拶もせずいきなり話を始めた。（いつもの事なのだが）今日の話は自分の持っているダイアの話らしい。

「このダイアは二十年前私がエジプトに行った時に…」

いつも通り、馬鹿馬鹿しい話だろうから聞き流すだけでいいだろう。

数十分後…

「では皆さん、今日の学習を頑張ってください」

やれやれ…やっと終わったかよ…

俺は歩いて出口へと向かった。

一番先に三年生くらいの男子生徒が体育館の扉を開いた。その次の瞬間…

「キヤアアアアアアアアア！」

近くにいた女子生徒が悲鳴を上げた。

扉を開いた男子生徒の首が宙に飛び、首のない胴体部分が噴水のように血をあたり一面に撒き散らしながらゆっくりと倒れたからである。

な…何事だ…？

俺がそう思った瞬間、入り口から数十人の少年少女らがゾロゾロと体育館の中に入って来た。その全員の手にはナイフなどの武器が握られている。

「生存者残り六百十一人…この学校は俺達SCYが乗っ取った！」

血の付いた日本刀を持った少年の声が体育館中に響きわたった。



### 第三章 ルール説明

「はあ？ふざけんじゃねえよ」

冥王小学校のガキ大将、内村が少年の前に出ようとしたその時、内村の肩から血が吹き出た。

「グアアアアアア」

内村は血が出ている肩を押さえながらその場に蹲ってしまった。

「次、私達にそんな態度とつたら今度は頭を撃つよ」

拳銃から出る煙を息で吹き消しながら一人の少女が楽しそうに言った。

「コイツら…一体何者だ？」

「まあ…今日俺達がこの学校にきたのは他でもない…」

ほとんど静寂に満ちた体育館に少年の声が響いた。

「君達冥王小学校の生徒、教員のみんなに、あるゲームをしてもらいたくてきたんだ」

刀や拳銃を使うようなやつだから、どうせとんでもないゲームだろう。

「ゲームのルールを説明しよう。」

まずお前らは授業が始まったら学校の敷地内だったらどこでもい  
いから逃げてくれ。俺達

はそんなお前達を殺していく」

その言葉で再び体育館の中は恐怖に包まれる。

「まあ、逃げるって言っても六時間目の終わりまでだからな」

六時間目の終わりまでか…！

「だが、絶対学校から出てはいけない、もし逃げだすようなヤツが  
いれば、e小1が昨日仕掛

けた爆弾でこの学校もろとも、ここにいる全員を吹っ飛ばしてや  
る」

eと呼ばれた少年が前に出てきた。そういえばコイツは昨日、木  
に金属製の箱をくくりつけていたヤツだ。そしてあの金属製の箱は  
爆弾だったのかよ…

それに逃げ出したくても逃げ出せねえよ…一時間目が始まったら  
数メートルの門が閉じられて、もし頑張って門やフェンスを登って  
も、上にある学校の防犯システムである高圧電流が流れて黒こげに  
なってしまう。

「まあ、これはただの蛇足かもしれないが俺達が服に付けているバ  
ッジを見ればソイツが誰  
か分かる」

俺はさっき生徒の首を切り落として、さっきから一人で喋ってる  
リーダーらしい少年のバッジを見てみた。

コイツの名前は…A…

絶対Aなんてのは本名じゃないだろう。おそらくコードネームか何かだ。

「よし、五分やるから、学校中を逃げる」

彼らはそう言うと、俺達に道を開けた。

「うわーーーーー」

たくさん生徒や教師達が我先にと出口に向かって走り出した。

「おい三堂！」

いつの間にか背後に浩二と今日子がいた。

「訳が分からないが、とにかく大勢で行った方がいいだろうから、一緒に行かないか？」

たしかに浩二の言う通りだ。アイツらの強さは分からないが、とにかく大勢で行った方が安全であるだろう。

「それじゃ…一緒に行くか！」

俺達三人は一緒に体育館から出た。

長い長い最悪の時間割が幕を開けた…

#### 第四章 一時間目？

俺達が教室へ戻った頃にはもう五分が経っていた。

「何か武器になる物を持って行った方がいいだろうな」

俺はどうせ持っていくならアイツらのような武器がよかったが、こんな学校にそんな武器が置いてある訳がない。家庭科室になら包丁があるだろうが今行ったらアイツらの誰かに見つかる危険性がある。

「箒かなにか持っていくか…」

そんなことで俺達は片手に箒を持つことになった。

「ギヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ……」

「ウワワワワワワワワワワワワワワワ……」

運動場からいくつもの悲鳴が聞こえてきた。

「始まったか…」

浩二が小さい声で呟いた。

「俺達も…行くか…」

俺達は最初に運動場へと向かおうと、二階から一階への階段へさしかかった時、頭の上から可愛らしい声が聞こえてきた。

「みーつけたー」

「!?!」

俺達が見上げたら、朝礼の時に内村の肩を打ち抜いた少女が俺達に拳銃を向けていた。この小女のコードネームは…b。

bが俺達の足元に拳銃の弾を当てた。硬いコンクリートの床が少し砕けた。

「逃げろ!?!」

俺達は急いで階段をすべり降りて一階へ行った。

「逃がさないですよー」

bは階段の柵を飛び越え、階段の中央部分に着地した。

「それじゃ」

bが冷たい銃口を俺達に向けたので、俺はとっさに武器(?)である箒をb小1に投げつけた。

「アッ!?!」

箒はbの顔面に当たり、バランスを崩したbは階段から派手に転がり落ちてしまった。

「大丈夫かな…この子…」

今日子が階段の下で伸びているbを見て心配そうに言った。

「知るもんか、こんなヤツ」

さすがに犯罪者に同情は出来ないので、俺はわざと冷たくそう言った。

「行こう」

俺達はbを残して、俺達は違う場所へと向かった。

「どこにいくの？」

今日子が俺に尋ねた。

「さあね」

とにかく、どこでもいいから目立たない所に行きたい。例えば…学校の倉庫だとか…

「いたぞ！」

後ろで声があったので、俺達は飛び上がった。俺達は後ろを見ると、大型のハサミを持った少年と、相当殺気立っているbがいた。

「逃げろ！！！」

「逃がさない！！！」

俺達は無我夢中で学校の廊下を走りまくった。

## 第五章 進藤英助

冥王小学校校長、進藤英助は一人で一階の廊下を歩いていた。

進藤は日本生まれのアメリカ育ちで、アメリカのエリート達にもまれて暮らしていた。進藤は大学卒業後、教師になるために日本に帰って来た。彼が教師になりたかった理由は、自分の手で未来のエンジニア達を育てていきたいと思ったのである。

だが実際に教師になって彼は日本の子供にひどく落胆した。

彼がどんなに厳しく教えても、どんなに優しく教えても、日本のほとんどの子供は学習能力に欠けていたのだ。

この国の教育は終わった…

そう思いながら彼は教師として生き、気付けば校長という地位に立っていた。

そんな中、校長である進藤は、この冥王小学校にやってきた。そこで、ようやく進藤は長年思ってきた自身の考えを改めた。

冥王小学校の生徒はアメリカのエリートとの…いや、世界エリートの子供達との差がほとんどなかったのだ。

彼はこんなすばらしい子供達に出会った事を、何よりも神に感謝した。

それにしても何だアイツらは…



進藤が悪態をついているのはもちろん、A達、SCYのメンバーである。

「あんな連中に殺されてたまるか…！」

進藤はそう叫んで一年二組の教室に入った。

何か…何か武器になる物を持たなくては…

進藤は側にあつた机の引き出しを開けた。教科書やら筆記用具などがきれいに収められている。

よし…

進藤は引き出しから小型のハサミを取り出した、武器としては頼りないだろうが、脅しにはなる。

進藤は左と右を見ながら慎重に教室からでた。外の方では悲鳴が大量にするが、ここはまだ無事のようにだ。

「どこに行こうか…」

やはりこんな時は、あまり出歩かず、どこかに隠れた方がいいだろう。

そうだ…！

進藤は絶好の隠れ場所を思いついた。

進藤は急いでその隠れ場所へと向かった。

その隠れ場所とはトイレである。ここなら内側から鍵を閉めてしまえば入るに入れなくなる。

進藤は急いで一番奥のトイレの扉を開けて、扉を閉じて鍵を閉めた。

「ふう……」

進藤は溜息をついて、小さな便器に腰掛けた。このまま、誰も来ないのを祈るしかなかった。

進藤がトイレに入った数十分後……

コツ……コツ……

トイレの入り口から足音が聞こえてきた。

「生徒か……？」

そうであってもらいたかった。ドクドクと心臓の鼓動が早くなっ

た。  
キイイイイ……バンツッ！

一番手前のトイレの扉が開いて、勢いよく閉じた音が聞こえた。その音はだんだん進藤が隠れているトイレに近づいてくる。

キイイイイ……バンツッ！

キイイイイ…バンツ!

その音はとうとう進藤の隠れているトイレの隣にまできた。次は進藤のトイレの番である。

ドクドクドクドク…心臓の鼓動がもつと早くなってきた。

ガタ…

進藤が入っているトイレの扉がガタリと揺れた。その音で進藤は飛び上がる。

「フンツ」

進藤の耳に外にいる人物が鼻で笑った。

ドオン!!ドオン!!

鼓膜が破れると思うくらいのすさまじい音がトイレに鳴り響いた。拳銃で進藤が入っているトイレの扉の鍵を壊したのだ。

銃声がやみ…

キイイイイ…

進藤が入っているトイレの扉が開いた。

トイレの外には、無表情で拳銃を進藤に向けている少年（B）が立っていた。

ドオン…

ドサ…

ボタン…

トイレの個室には、進藤の死体だけが転がっていた…

## 第六章 一時間目？

ハア…ハア…

「ようやくアイツらをまいたか…」

数十分間全力で走り続けて俺達はもう疲れ果てていた。

「アイツらつて、（疲れる）って言葉を知らないようだからな…」

本当にbとハサミの少年をまくのには苦労したのだ。足の早さは俺達の方が上だったのだがbの拳銃の弾が顔の横をヒュンヒュンと通ってくるので、俺達はそれにも気をつけなければならなかった。

「これで…私達は自分の人生の運を使い果たしたかもしれないわね…」

「バカ言つなよ、六時間目まであるんだぜ」

「それで…？ここはどこだ？」

逃げるのに夢中だった俺達は今、自分達がどこにいるか分からなかった。

「ここは確か…三階の三年生の教室がある所だな…」

浩二があたりを見渡して言った。

「こんな所にまできちまつたんだな…」

俺はしみじみと呟いた。

「ねえ…」

今日子が俺の腕を掴んだ。

「どうした？」

「何か…変な音がしない…？」

俺は目をつぶって耳を澄ました。

ピチャ…ピチャ…

「本当だ…」

「三年一組の教室から聞こえるな」

浩二にもその音が聞こえたらしく、サッと三年一組の教室の扉の前に行った。扉を開けて、何かあるのか見るのだろう。

「まで、浩二」

「なんだ、三堂」

「二人でこの扉を開けないか？」

扉を開けた瞬間、今日の朝礼の時の男子生徒みたいにならないとも限らない。

「…いいだろう」

俺達は一、二、三、と小声で言うと、勢いよく扉を開いた。

「う…」

教室の中は地獄絵だった。数体の死体が転がっており、壁や床には血や肉片、飛び出した臓器がこびり付き、異様な臭いを出していた。さっきのピチャ、ピチャという音は天井に飛んだ血が床に滴り落ちていく音だった。

「どうしたの？」

今日子が近づいてきて、教室の中を覗こうとした。

「見ちゃダメだ!」

今日子には相当刺激が強だろうから、俺達は中の様子を見せまいと、急いで扉を閉めた。

「何よ」

今日子の頬つぺたがプクッと膨らんだ。

「アイツら下…」

浩二が唸るように口を開いた。

「アイツらにこんな事をする権利なんてあるのかよ!」

浩二の叫び声が廊下に響いた。

「学校を占領しやがったと思えば次は大量虐殺かよ…！俺達がアイツらに何をしたらって言うんだよ…！！」

「もうやめる浩二、お前の声でアイツらが…」

俺は優しく浩二の肩に手を置いたが、浩二はその手を振り払った。

「ウルセエ！」

浩二の目は赤く充血していた。浩二と俺との間に沈黙が流れた。今日子は手で口を押さえ、浩二の方を黙って見ている。

「…すまない…三堂…」

浩二が下に顔を伏せた。

「勝手に自分勝手な事をいきなり叫んで…」

浩二の声が涙声になった。

「いいんだよ、お前は自分の思ってた事を言ったただけだよ」

「…ありがとう…」

浩二がそう呟いた時、俺達の後ろの方で慌しい足音がした。

「よしっ！必ず六時間目まで生き残ってアイツらを見返してやるっ」



ぜ！」

「…ああ！」

俺達三人はまた再び、廊下を走り出した。

## 第七章 X

丁度その頃、SCYのハサミの少年…Xはbと分かれて一人で歩いていていた。

「まったく…皆、俺を見ると逃げあがって…素直にこの俺に殺されるってんだ…」

Xは持っているハサミをチヨキチヨキと鳴らしながら外に出た。

もうそろそろ警察の連中がやってきてもいい頃なんだが…と、そう思った時、近くで物音がした。

「誰だ！」

Xがそう叫んだ瞬間、バタバタと音がして、人が走り去るような感じがした。

やってやるか…

Xはハサミを持ち直し、音がした方に走り出した。Xの数十メートル先には二、三年生あたりかと思われる少年が走っていた。

「やてやてやてやて…」

Xと少年の差はどんどん迫ってきた。少年の方もXに捕まるまいと、足のスピードを上げる。

「おとなしく…この俺に…殺されるってんだ!!」

Xもそう叫んで足のスピードを上げる。

残り約三メートル…二メートル…一メートル…

「捕まえたぜえ！」

Xは少年に飛びかかり、馬乗りになる。少年の顔は涙、鼻水、汗でグシヨグシヨだ。

「始めるか…」

そう呟くと、Xはハサミで少年の服を引き裂いた。少年も必死になって抵抗するが、彼には通用しない。

Xはハサミで抵抗出来ないようにと、素早く少年の両手を切り落とした。

「ぎゃああああ…」

少年は苦しそうに叫ぶが、Xは気にせず次の作業に取り掛かる。

Xはポケットから小型のハサミを取り出した。そのハサミの刃を露わになっている少年の脇腹に突き刺した。

「えい」

チヨキチヨキチヨキチヨキ…

少年の脇腹から血がブハッと、あたりに飛び散る。

「……………」

Xはパツクリと開いた少年の脇腹に腕を突っ込んだ。

「これは…大腸あたりか…」

Xはそれを鷲掴みにすると、えいっと引きずり出した。

「やっぱり大腸だったか…」

Xはハサミで少年の大腸を細かく刻むと、あたり一面に適当に撒き散らした。

「よし…」

再びXは脇腹に腕を突っ込むと、あたりを探った。

今度は上の方についてみるか…

Xはすぐに行動に移した。

おっ…これは…

Xはもう一本の腕を脇腹に突っ込んだ。Xはそれを傷つけないように静かに取り出した。

「綺麗に肝が取れたか…」

Xはウツトリと取り出した心臓をしばらく見つめると、ポケット

からビニール袋を取り出して、その中にさっき手に入れた心臓を入れた。

「コイツを標本にすれば一生の宝物になるぜ……」

Xは不気味にニヤツと笑うと立ち上がり、少年の死体を残して、また新たな獲物を探しに出掛けた……

## 第八章 五分休み？

キーン、コーン、カーン、コーン

「一時間目が…終わったね…」

この学校では二時間目と三時間目、四時間目と五時間目以外の授業と授業の間に五分間の休憩時間があるのだ。

「アイツら…まさかこの時間にもやってこないよな…」

俺も四十五分間（この学校の授業の時間は四十五分間ある）走り回ったので、せめてこの時間だけは休みたかった。

「外の空気吸ってこようぜ」

浩二の提案で俺達は外の方に行く事にした。

玄関から上靴のまま外にでた俺達は外の光景に呆然となった。

運動場には首の取れた死体や、腹から臓器がはみ出している死体が五十体ほど転がっていた。

「これが…これが人間のすること…？」

「たしかアイツらSCYとか言ったっけ？一体何者なんだよ…」

俺達はあたりをグルッと見渡した。

「あっ！」

今日子が突然声を上げた。何かを見つけたらしい。

「たぶん…生徒みたいなお子がいるっ！」

「何！？」

今日子が先に走り出したので、俺達もその後を追った。

「おっ！」

たしかにここの生徒らしき女子生徒が歩いていた。

「おい！」

浩二が手を振って女子生徒に呼びかけた。

その女子生徒には俺はあまり興味がなかったが、生きている生徒に出会えて嬉しくなったのだ。

俺達はその女子生徒の周りに集まった。

「…何ですか？」

女子生徒は無愛想な様子で言った。

「いや…特に君にようは無いんだが…」

「そうですか」

女子生徒はそう言うと、クルリと回れ右をして歩き出した。

「まって！」

今日子が女子生徒を呼び止めた。

「何？今度は…」

女子生徒の方も段々苛立ってきたようだ。

「私達と一緒にいかない？」

今日子がそう女子生徒に聞いた。確かにたくさんヤツといた方がいいだろう。女子生徒は少し黙ったのち、俺達に言った。

「あなた達のお父様は何の職業をしているのですか」

いきなりそう聞かれたが、俺達は答える事にした。

「俺の親父は大手の会社の部長をやってるぜ」

これは浩二の父さんだ。

「私のお父さんは工場の工場長をやってるけど…」

これは今日子だ。

「俺の父さんは参議院議員だ」



これは俺だ。

女子生徒はまるで汚らわしい物を見るような顔を見ると、走って  
いってしまった。

「何だよ、あいつ…」

「たしか、あの子は大手の会社の社長の娘さんよ。名前はたしか…  
鹿塚奈緒美ちゃんだったっけ…」

俺達は学校のしげみの方にいった。

「こんな所に生徒は…」

俺がしげみを覗き込んだ瞬間、しげみから何かが出てきて、俺に  
ぶつかった。

「誰だ!!」

俺達は武器である筈を構えた。

「俺だ、知らないか？」

「お前は…奥村…」

奥村昭平は六年一組の生徒だ。六年生になるまで俺はコイツと数  
える程しか話しをした事がないが、噂によると、あまり成績はよく  
ないらしい。

「それにしても、お前ら生きてたのか」

奥村はニヤニヤしながら言った。

「一時間目なんかで死ぬような俺達じゃねえよ」

「フンツ、それにしてもお前からこんなチャチな武器しか持ってないのか？」

奥村が俺達が片手に持っている箒を指した。俺達だってこんなものを持ちたくて持ってんじゃねえよ。

「俺はこれを持ってるぜ」

奥村が出したのは、刃渡り三十センチほどのジャックナイフだった。

「おっ…お前こんな学校に…」

浩二がたじろいた。

「なあに…ただの護身用のナイフさ」

奥村が浩二に突き出した。

「やめる奥村、必要な時以外鞘から出すな」

「…分かったよ…」

奥村がナイフを鞘にしまった時だった。

キーン、コーン、カーン、コーン

二時間目が始まった。

## 第九章 二時間目？

「いたぞー!!」

始まった途端に誰かに見つかったらしい。

「コイツを使う時がきたか…」

奥村がまたナイフを鞘から出した。

「もうやめろ、六時間目まで逃げ切っても、留置所に送られたら仕方ないだろ」

浩二が奥村に言った。

「大丈夫、殺しはしない」

そう言って奥村は走り出した。

俺達を見つけたのは竹ヤリを持った少年と、パチンコを持った少年だった。

「俺達と同レベルの武器だな…」

「まあ、Aのような立派な武器じゃないだけまだましかな」

遠くで奥村と少年二人が戦っているのが見える。奥村はなにかスポーツか何かをやっていたのだろうか？竹ヤリやパチンコの弾をよけて尽かさず二人に拳でダメージを与える。数分が経った時、SC

Yの二人はとうとう奥村の攻撃で地面に倒れてしまった。

「どうだ？なかなか強いだろ？」

俺達に近づいて、奥村は笑いながら言った。

「お前…なにかスポーツをやったのか？」

「いや、別に何もやってないが」

それでこの身こなしか…

「まあ、Aや拳銃を使う人とかになったら全く通用しないかもね…」

「奥村…」

俺は奥村に話しかけた。

「俺達…お前と一緒に行っていいか？」

「えっ？」

こんなに強いヤツといたら俺達は六時間目まで逃げ切れるかもしれない…俺はそう考えたのだ。

奥村は少し考えた後、言った。

「足でまといになるなよ…」

そう言って奥村は歩き出した。俺達は顔を見合わせて頷くと、奥

村の後を追った。

「ここは…」

奥村についていった所は外にある体育倉庫だった。

「ここなら、いろいろな物があるから、隠れやすいだろう」

奥村はそう言って、跳び箱と跳び箱の間の隙間にスウツと入った。

奥村の言う通り、この体育倉庫は目立たないし、隠れる所ならいくらでもあった。

「よし」

俺は梯子をよじ登り、体育倉庫の奥へと足を運んだ。浩二や今日子も同じようにいろいろな場所に隠れる。

「アツ!」

俺達が隠れてから数分後、今日子が声を上げた。

「どうした…」

浩二が小声で今日子に聞く。

「私が隠れてた所に…こんな物が…」

今日子が出した物は、時計のような機械だった。

「それは…テレビか何かに出てくる時限爆弾ってやつだな…」

奥村がスツと顔を出した。

「エッ…」

俺達は思わず声を出したが、奥村はあいかわらず落ち着いた表情だ。

「あと五分ほどあるが…どうする？今からここを出るか？それとも爆発する本当にギリギリまでここにいるか？」

俺はこんな所から今すぐにここから逃げ出したかったが、今ここを出たらすぐにアイツらの誰かに見つかってしまつかもしれない。

「…ギリギリまでいよう」

「決まりだな」

五分が経つまで相当早く感じられた。

「あと三十秒……十……九……八……七……六……五……四……三……二……一……今だ！！」

俺達は素早く体育倉庫から飛び出した。

文字にならないほどの物凄い爆発音が俺達の後ろでして、俺達はその爆風で吹き飛ばされた。

「げほっ、げほっ…皆、大丈夫か…？」

俺は咳をしながらも、煙の中で皆を呼んだ。

「俺は大丈夫だ」

奥村が俺の数メートル離れた所で起き上がった。

「浩二！今日子！」

「ここにいるよ」

俺の後ろで二人の声がした。良かった…無事で…

「それにしても…これからどうすればいいの…？」

今日子が瓦礫となった体育倉庫を見て呆然とした。

「どうしたもこうしたも…こうなったらいろいろな所をいくしかないだろう」

奥村は身も達者だが口も達者だ」

俺達は死体だらけの運動場をブラブラと歩いた。すると突然、今日子が校舎の屋上を見た。



「どうした？今日子」

「なんだろう？…あれ…」

俺達も校舎の屋上を見た。

屋上のフェンスの外に、【528】と映し出された大画面が置いてあった。

「あっ」

大画面に映っている数字が【527】になった。

「また減った」

今度は一気に三つ減って【524】になった。

「まさかこれは…この学校の中で生きている生徒の数だ…」

「何っ!?!」

「そうならば…もう八十八人も生徒が…」

「三堂…君の想像どおりだ」

浩二がそう言ったとき、中庭の方で喉が裂けるほどの悲鳴が聞こえてきた。

「いくぞ…!…!」

奥村が走り出したので、俺達は仕方なく彼の後を追った。



金の事を考えると口から笑みがこぼれる。だがその笑みもすぐに消えた。気づけば彼女の周囲は惨殺された死体だらけになっていたのだ。

胸に小型の斧が突き刺さっている死体。

両足と両腕を切断されて、身動きがとれない状態で、なにかにメッタ刺しにされた死体。

グチャグチャのミンチにされた死体：

「美しいだろう？」

突然、奈緒美の後で低い声がした。

「だ…誰…」

奈緒美は震えながら振り向いた。

「……………！！！」

奈緒美は恐怖のあまり、悲鳴を上げる事が出来なかった。

奈緒美の後ろにいた少年（P）の目がある部分には、なにやら不気味な機械のような物が張り付いており、手には血がベツタリと付いた斧が握られていた。

「俺が初めて作品を作ったのは6歳の時だ。材料になってくれたのは生後間もない赤ん坊と、まだ若いその母親だったよ。二人そろっていい作品になってくれた…」



Pの斧の刃が奈緒美の頭の上に落とされた。奈緒美の頭が割れ、黄色い物がビヤツと飛び出た。

奈緒美のこの最後の断末魔を一郎達が聞きつけて、この死体だらけの中庭にくるのだった。

## 第十一章 二時間目？

俺達は中庭に辿り着いた。

「はあ…」

中庭は惨殺された死体だけだった。

「池の水も血で赤く染まつてる…」

「おい…あそこ！」

浩二が小声で叫んだ。

「人が…」

ぐしゃ…ぐしゃ…

「うえ…」

俺は目を背けた。人が斧でズタズタのされていたのだ。誰なのかは分からないが、絶対冥王小学校の生徒だろう。

「早くここから逃げた方が…ハクション！！」

「バカ！浩二！」

たしかにここは外だし、まだ二月の中旬だから寒いのは当たり前だが、こんな所でくしゃみをする事はないだろう。

「ヤバッ、アイツがこっちに気付いたみたい」

ビュッ

「伏せる!!」

奥村が叫んでその場にしゃがんだので、俺達も奥村の真似をしてしゃがんだら、自分達の上を、小型の斧が通過していくのが見えた。

「盗み見はよくないぞ!!」

巨大な斧を持った少年が俺達に近づいてきた。歳はおそらく十五歳あたりだろう。目の部分になにやら変な機械が張り付いている。

「君達の名前は…鈴木今日子…三堂一郎…奥村昭平…中島浩二…か…君達も俺のいい作品になってくれそうだな!!」

少年はそう言うと、物凄い高さのジャンプをした。

「上から切り刻んでやる!!」

「逃げる!!」

俺と今日子は右に、浩二と奥村は左に散った。

「どっちからいこうか…」

着地した少年が俺達四人の方を見渡した。



「んじゃ…こっちにするか！」

少年が俺達の方に走り出した。

「いい芸術作品になってくれよ！三堂一郎！鈴木今日子！」

どンドン俺達二人と少年の差は縮まっていく。

「きゃ」

今日子が木の根につまずいて、派手のこけてしまった。

「シネエ！…！！…！！」

少年が斧を今日子に向けて振り上げた。

「今日子！」

どうしよう…俺はとっさに持っていた箒を少年の顔に叩き付けた。

「グッ！」

少年は斧を落として、両手で目についている機械を押さえ込んで、その場に座り込んだ。彼に何があったのだろうか？

「いっしょー！」

今日子が叫んだので、俺達は浩一と奥村の方に走り出した。

「大丈夫か！？」

浩二が心配そうに叫んだ。

「ああ、それにしてもアイツどうしたんだ？」

俺は座り込んで唸っている少年を指差した。

「知らないよ、こんな事俺は」

「いくぞ、お前ら」

俺達は中庭を出て、また再びヤツらからへの逃走を続けた。

## 第十二章 P

Pは闇の中でおろおろとしていた。

Pの目は数年前、とあるライバル組織のメンバーとやり合った時に両目とも潰されてしまったのだ。目の見えなくなった彼は、自分の貯金を全部はたいてこの機械を買った。(もちろん裏の世界で買った)

この機械は目の神経を繋げて、見えるようにするといった、言わば(人工の目)といった所だろう。この機械は防水などにも優れているのだが、何よりも相当すごい機能が隠されている。その機能とは、戸籍などに登録されていれば、その人物の名前が見られるというすごい機能が付いているのだ。なので、奈緒美や一郎達の名前が一瞬で分かったのもこのためである。

だが、このすばらしい機械にも、一つだけ欠点があるのだ。

それは、非常にもろく、ちょっとした衝撃だけで壊れてしまうのだ。

「…どっしょいしょい…」

Pが途方にくれていると、遠くの方で足音がした。

「SCYの人間でいてくれよな…」

Pが呟いた時、向こうの方から声を掛けてくれた。

「おっ！Pじゃなか。どうしたんだ？こんな所で」

よかった…

彼に声を掛けてくれたのはeであった。彼は爆弾作りが得意だが、機械などを扱うのも、大の得意なのである。

コイツがいれば俺の目を直してくれる！Pはそう思った。

「丁度よかった！実はちょっとへまをおかしてな…」

「へま？」

「そうだ！だからこの目を直してくれないか」

Pは壊れた機械を指差した。

「…P…悪いけど俺今、直す道具持ってないぞ」

Pはガーンと頭を殴られたような感じがした。

「それにな、仮に道具を持ってたとしても、俺にはこの機械を直す事はできない。それ専門の知識を持ったヤツじゃないと直せないだろっ」

eはボンとPの肩に手を置いた。

「よし、俺が責任を持ってお前を隠れ家に連れて行ってやる。あそこなら、お前の代わりのヤツが数人るだろっ」

Pにもし本物の目があったのなら、彼は悔しさの余り、涙を流していただろう。

「いくぞ、P」

Pは手をeに握られ、暗闇の中を歩き出した。

おのれ…三堂一郎…

訓練された犯罪者にとって、高い電流の流れるフェンスを誰にも見つかる事無く上る事はけして難しいものではなかった。

Pはeに連れられ、冥王小学校から少し離れた隠れ家に来た。

隠れ家というのは、今回の計画のため、Aが頑張って借りた狭いアパートの一室だった。

「入るぞ」

eは一言声を掛けて、部屋の扉を開けた。

「なんだ、お前しかないのか」

目の見えなくなっているPには、誰がいるのか分からなかったが、どうやら一人しかいないらしい。

「ほかの皆はどうした？」

「スコシハヤメノチュウシヨクヲタバニツタケド」

言葉が片言の少女の声が入ってきた。aか…

「そうか、ならお前に頼むか」

「エッ？」

暗いaの声が一瞬明るくなった。

「いや、実はな、Pの目がちょっと壊れてな」

「ソウナノ、カワイソウ」

「P、もしEのヤツが帰ってきたら、目の修復を頼んでみる。アイツなら直せるかもしれない」

「…分かった」

「いくぞ、a」

二人がいつてしまうと、薄暗い部屋には目の見えないPが取り残された。

「暇だな…」

### 第十三章 二十分休み

チャイムが高々と鳴って、二時間目が終わった。

「生存者の数を見に行こう」

浩二の提案で俺達は運動場へいった。校舎の屋上の大画面は、【486】と映し出されていた。

「だいぶ減ったんだな…」

俺があたりを見渡すと、まだかなりの生徒がフラフラと歩いていたが、皆目が死んでいた。

「もしかすると、もうすぐこの中から犠牲者が出るかもな」

「そんな事を言うのはやめろ、奥村」

「ハイハイ…」

奥村の言う通り、もしかしたらこの中から犠牲者が出てしまうかもしれない。

「落ち着く所にいかない？」

二時間目と三時間目の間は二十分間の休み時間がある。俺は腕時計をみたら、まだ五分しか経っていなかった。

「いくか…」



俺達は玄関から校舎の中に入った。

「どこか…落ち着く所にいこう」

「それなら…」

奥村が指を指した部屋は保健室だった。

「ここなら柔らかいベッドやソファがある」

問題は死体があるかないかだ。

「失礼します」

俺は一言声をかけて保健室の扉をガラガラと開けた。ソファには…先客が二人いた。

「おっ、お前らか」

そこにいたのは俺達の担任の大崎東先生と、三年生担任の舟原供太先生だった。この二人は外にいた他の生徒達とは違って、まだ僅かに目に何かの光があった。

「せ…先生！」

今日子が俺を押しつけて、保健室の中に入った。

「おお、鈴木、お前もいたのか」

「まあ、君達も座りなさい」

舟原先生に言われて俺達は仕方なく開いているベッドやソファに座った。

「他の先生方は？」

ベッドに座った瞬間に、俺は先生にそう言った。

「…探してみればまだいるのかもしれないが…私達が出会った先生達は全員死んだ」

俺は改めてアイツら、SCYの威力を思い知った。

「もしかしたら…俺達しか教師陣は残ってないかもな…」

たしかに生徒達に比べて教師は少ないが、これはないだろう。

「俺達のクラスの生徒は！？」

「たぶん…半分くらいしか残ってないだろう」

「そんな…」

俺の体全体から力が抜けていくのが感じられた。

「そうだ」

浩二がハツとした様に先生達に言った。

「僕達と一緒にいきませんか？大勢の方が安全だろうですし」

先生達は少し黙って考えると、舟原先生が口を開いた。

「こんな時まで…君達生徒の面倒を見切れないよ、それに私は今ここで死ぬわけには…」

「…そうですか」

キーン、コーン、カーン、コーン

「三時間目が…始まったか…」

「いくか」

俺達六人は保健室から出た。幸いやツらはいない。

「お前ら」

東先生が俺達四人に言った。

「…気をつけるよ…」

そう言うと、先生達は廊下を走りだした。

「俺達もいくぞ！」

「よしっ！」

気合をいれ、俺達は再び修羅の巷へとくり出した。

## 第十四章 三時間目？

「どこにいこうか」

廊下を歩いていると、今日子が言った。

「どこだろうっな…」

移動ができる範囲はこの学校の狭い敷地内だけだ。

「六時間目まで気合を入れていこうぜ！」

浩二が数十センチ飛び上がった。

「まあ…どこにもいかないのなら、外にでもいこうか…」

奥村の提案で、俺達は玄関から外に出た。目の前を生徒達がチヨロチヨロと走りまわる。

「俺達ほどまだ元気がある生徒達は一体何人いるんだろうっな」

「はははっ」

こんな状況だが、だいぶ俺達は落ち着いてきた。

「おい」

奥村が遠くを指差した。

「だいぶ野次馬が集まってきたようだな」

「ほ…本当だ！」

学校の外にはちらほらと人が集まり始めたようだ。

「休み時間にあそこについてみよう」

「ああ」

「貴様ら〜」

二時間目の最初に、奥村に倒された少年二人がいた。

「おっ、お前らか」

奥村は一回倒したので、完全になめきった口調だ。

「今度は絶対に負けないぞ」

「へッ」

奥村は中指をピンと立てて、二人に向かって突き出した。バカッ  
！！挑発なんかするな！！

「ふん…貴様らなんかこんな代物を使いたくなくなかったが…」

少年達はポケットからなにかを取り出した。

「注射器か…？」

浩二がボソリと呟いた。

「注射器：たしかにそうだが、この中に入っているコイツに注目してほしかったな」

たしかに、この注射器の中に入っている赤い液体状の薬のような物が入っているが、それがなんだと言うのだ。

「コイツはSCYの科学部が特別に作り出した、通称、【Daemon blood】と呼ばれている薬さ。

コイツを体に投与すると約二十四時間、悪魔のような強さを手に入れられるのさ！」

「……………」

ここまで見えすぎた嘘がこの世にあるとは…俺達は絶句して声を失った。

「あまりのすごさに声も出ないか？」

二人はそう言うと、注射器の針を自分達の腕に突き刺した。今日子が目を逸らす。彼女は注射が苦手らしい。

二人は空の注射器を地面に落とすと、それぞれの武器を構えた。

「いくぞ！」

一人がパチンコの弾を飛ばした。

「大丈夫、どうせ当たっても大したダメージは…」

グシャ…

「…今…なにが起きた…？」

奥村が俺達に聞いた。

「キヤアアアアアア！」

今日子が浩二を見て大きな悲鳴を上げる。

「お前…手が…」

そう、奥村の左腕の手首が無くなって、血がポタポタと流れていたのである。その無くなった奥村の手は、粉々に飛び散って、辺りを赤く染めていた。

「どうだ！！【Daemonblood】の威力は！！！」

奥村の手をすっ飛ばしたパチンコを持った少年がハハハハと、高々に笑い声を上げた。

「さーて…今度は右腕をいくか…」

少年が三つくらいの弾をいっきにパチンコに込めた。

「逃げるぞー！」

俺達はそうさ叫んで、近くのしげみに飛び込んだ。やはりしげみ

の中も、肉片や服の切れ端が散乱していた。

「逃がすか!!」

パチンコの弾が飛んできて、木の幹や草の葉を吹き飛ばす。

ようやくしげみから出た俺達は、フウツと息を吐いた。

「血が…」

奥村の手から出ている血が地面を赤く染める。

「早く…早く出血を止めないと！」

たしかに、このままだと大量出血で死んでしまう。

「どこか人がいない所に行って休もう」

そついつ事で、俺達はまた走り出した。



## 第十五章 舟原供太

冥王小学校教師、舟原供太と大崎東は一郎達と別れた後、すぐ外に出て歩いていった。

「アイツら…大丈夫でしょうかね…？」

大崎が心配そうに言った。自分の教え子なのだから無理もないだろう。

「なあに、二時間目まで逃げ切れた運のいい子達だから、心配もいらないでしょう」

そんな事を言う舟原も、本当は教師として一郎達と一緒にいつてやりたいと思っていたが、今の彼にはそれが出来なかった。

彼には妊娠して、今日子供を出産する妻がいるのだ。

男の子か女の子かはまだ知らされていないが、舟原は男の子でも女の子でもよかった、とにかく彼は子供が欲しい、ただそれだけだった。

だから、舟原は今ここで死ぬ訳にはいかないのだ。

自分の子供を腕に抱いて、妻と共に笑うまでは…

「さて、大崎先生、どこにいきましょうか？」

「じゃあ、一年生用の遊具がある所に行きましょうか」

二人がそこにいきこうと歩き始めた時、ビュッという音がした。

「な…なんだ!？」

気付けば二人の目の前にはバットを持った少女(D)が立っていた。

「な…なんだね…」

大崎が声を震わせて言った。

「もちろん…」

Dがバットを構えた。

「アンタ達を殺しにきたのよ!!!!」

「逃げて下さい!大崎先生!」

Dが駆け出すのよりも、舟原の指示の方が早く、大崎は全速力で違う方向に走り出した。

「よ…」

ばっっ…

舟原も大崎に続いて逃げようとした時、腹に相当の激痛が走った。

「ぐっっ…」

Dのバットが腹にめり込んでいたのである。

ガキッ

「がああああ……」

今度は頭にバットが当たり、舟原は数メートル吹き飛んだ。

ぼと……

殴られた衝撃で、舟原の左目の眼球が取れた。

「ああ……ああ……」

「それ……!」

Dが声を上げて四つんばいになっている舟原に向かってバットを振り落とした。

バキイイイイ……

「ギヤアアアアア!」

「あっ!この音は背骨が折れた音ね!」

Dはさらにこの音で興奮したらしく、さらにバットを振り上げた。

「ぎやああああ……ガハアアアアア……ぐふうふうふう……」

学校に舟原の叫び声が響き渡った…

どのくらいの時間が経っただろうか？

舟原はアスファルトの上で倒れていた。Dはもうどこかにいってしまっただらしく、もういない。

「ハア…ハア…」

残り一つしかない目がぼやけて辺りがよく見えない。体のほとんどの骨はメキメキに折られ、タコになった気分だ。体中が痛い。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ

舟原のポケットに入っている携帯電話が静寂した中に鳴った。

なんだ…

舟原はポケットから携帯電話を取り出した。

「これは…」

相手は舟原の妻であった。

「はい…もしもし…」

舟原はかすれた声で応じた。

「あなた…やっと生まれたわよ！」

妻の声は喜びに満ち溢れていた。

「そうか…そうか…」

舟原の傷んだ体から喜びが噴出してきた。

「元気な男の子の赤ちゃんよ！目元口元はあなたにそっくりよ！」

「…ほう…それは…」

携帯電話の奥から赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

舟原はそれを聞くと、ポトリと携帯電話を血の海の中に落とした。

「……あなた…ねえあなた！」

子供の顔は見れなかったものの、無事生まれてきた事だけで、彼は胸がいつぱいだった…

また一つ、尊い命が失われたのであった…

## 第十六章 三時間目？

俺達は体育館裏の目立たない場所で奥村の治療（応急処置）にあ  
たっていた。

「大丈夫？」

今日子がハンカチで奥村の出血している手を押さえた。

「だいぶ出血は収まったようだから、そろそろいった方がいいんじ  
やないのか？」

浩二がそう言った瞬間、右の方からコツコツと足音がした。

「おい、この足音、こっちに向かってるぞ」

俺達は急いで箒とナイフを構えた。

「お願いだから、生徒でいてね…」

今日子が呟いた。俺もそうであってもらいたい…

すぐにその足音が誰の物か分かった。

「なんだ生徒か…」

たしかに冥王小学校の男子生徒であった。おそらく五年生くらい  
だろう。だが、なんとなく様子がおかしい。足取りはふらつき、ま  
るでゾンビみたいだ。

「おい、どうしたんだ？」

俺は試しにその生徒を呼んでみた。すると突然、その生徒がバタリとその場に倒れた。

「キヤアアアアア！」

俺も今日子のように叫びたかったが、恐ろしさの余り、声が出なかった。

男子生徒の背中は、刃物か何かでメッタ切りにされていて、陰でよく見えなかったが、腸が脇腹から飛び出していた。

すると、男子生徒が出てきた所から、日本刀を持ったヤツが出てきた。

顔が不気味に白い。いや、顔を白いマスクで覆っているのだ。

「オヤ、コンナトコロニモセイトガイタノネ……」

声からして女のようなのだが、俺達の命を狙う殺人者には変わりはない。

「逃げるぞー！」

俺はそう叫んできた道を戻ろうとした。

「さっきはまんまと逃げ出しあがって……」

俺の前にさっきまいた奥村の手をすっ飛ばした少年二人が現れた。

「クソッ！」

俺達は挟み撃ちにされてしまったのだ。

「どうすれはいいの…。」

「ドウシヨウモコウシヨウモナイデシヨ」

「黙れ！」

右には日本刀を持った少女、左には人の腕を軽くふっ飛ばしきれぬ少年二人…もう終わりか…

「うらあああああ…！」

「浩二！」

浩二が俺の脇を通過して、二人の少年に向かって走り出した。

「くらえ！」

浩二が少年一人の顔面を拳でぶん殴った。

「ぎゃあ…！」

浩二に殴られた少年は、空いている手で顔を押しさえた。

浩二は振り向いて俺達に小声で叫んだ。



「コイツらは俺が食い止めるから、お前らは逃げる！」

どうやら浩二は自分が囿になって俺達を逃がす作戦らしい。

「いくぞ！」

俺と今日子、奥村は少女の脇を通り抜けようとした。

「ニガサナイ」

少女が日本刀を振り上げたその時、少女の体が宙を飛んだ。浩二が足で少女の顔（顎）を蹴り上げたのだ。

「俺が相手になってやるぜ！このゴムマスク！」

浩二が少女の腹を蹴り上げようとした時、竹ヤリを持った少年が後ろから浩二の腹を思いつきり突き刺した。

「中島君！！」

今日子が叫んだ。

「ぐ…ぐあああああああああ！！！」

浩二は口から血を嘔吐しながら少年の首根っこを引っつかんだ。

「浩二！」

俺は浩二のもとへ行くこうとした。

「くるな！バカ！」

俺に対して浩二がそう叫んだ瞬間、浩二の背中から血が思いつきり噴出した。少女が日本刀で浩二の背中をぶった切ったのだ。

「ドウヤラアナタハワタシタチヲオコラセタヨウネ……」

その場にぶっ倒れた浩二の首を切りつけた。

「死ね！」

パチンコの少年が弾を浩二の頭に飛ばした。

浩二の頭がはじけ飛び、赤い血と黄色い脳みそがあたりに飛び散った。

浩二は死んだ。

「いくぞ！三堂！」

奥村の声で俺達は走り出した。

俺は走る途中、浩二の死体をチラリと見た。

死んでいるのにもかかわらず、三人は問答無用に浩二の死体を切り刻んでいく。

「さよなら、浩二……」

そういえば浩二は俺にとって、初めての友達だった。そう、あの  
一年生の九月の日のまだ残暑が厳しい時の事だった…

## 第十七章 浩二との出会い

「チクシヨウ！ふざけあがって！」

家に帰る途中、俺は足元にあつた小石を蹴飛ばした。その時、俺は何で苛立っていたのかというと今日の二時間目の算数の時間に当分の俺の担任が何の予告もなしにいきなり算数のテストを俺達にさせ始めたのだ。

それだけなら俺はここまで苛立たなかった。なのになぜ俺がこんなに苛立ったのかというと、まだ授業で習っていない所まで出てきたのだ。

もしも予告の一つしてくれたのなら、予習でも何でもしただろうが、予告もなしにテストをされたのならいい点がとれる訳がない。

そのおかげでテストの点数は四十点だった…

俺が担任から答案用紙を受け取った時、担任が俺に言った言葉がこうだ。

「こんな簡単なテストでこんな点数なんか取ったら人間として失格だよ」

その言葉を聞いた時、俺は始めて皆の前で泣いた。その日は皆、俺に話しかけてこなかった。

「あああああ！」

俺は頭を掻き毟り、ランドセルを放り出し、その場に倒れこんだ。

人は俺以外いない感じがした。

「はああああ……」

俺は大きく溜息をついた。

人間として失格だよ。

人間として失格だよ。

人間として失格だよ。

……先生は間違っていない。

日頃から予習をしていなかった俺が悪いのだ。

そんな人間として失格なヤツがこの世に生きてていいのだろうか？

俺はランドセルを開き、筆箱をだした。

筆箱を開き、カッターナイフを取り出した。

カチカチカチカチカチ……

カッターナイフから刃を出す音が辺りに小さく響く。

俺はそのカッターナイフの刃を自分の手首にあてた。

最悪の人生だった……

俺は静かに目を閉じた。

「おい！！なにやってんだよ！！」

その声と共に、俺は一メートル位突き飛ばされた。

カッターナイフが地面を滑る。

「ふざけんじゃねえぞ！お前！」

誰だ？コイツは？

俺は俺を突き飛ばしたヤツの顔をよく見ようと、顔を上げた。

「お前は……」

同じクラスの中島浩二だった。

「一人でコソコソ何をやっているのかと思えば……こんなバカな事をしていたのか！」

浩二はしばらく俺を黙って睨みつけると、口を開いた。

「……たかがテストで悪い点取ったて……いくら先生に「お前は人間失格だつて言われても、絶対に大切な命だけは粗末にしちゃいけないぞ」

そう言うと、浩二は片手をスツと俺に差し伸べた。

「ほらっ、俺がお前の家まで送ってやるよ」

俺は黙って浩二の手を握ると、その場に立ちあがった。

「それじゃ、いこうか」

家に着くと、母さんは先生からテストの結果を聞いたのか、俺はバツとして一カ月間トイレや食事、学校に行く以外、自分の部屋から出る事を禁止された。

次の日、俺は学校に着き、机に座ると、誰かが俺の机の前に立った。

中島浩二だ。

浩二は少し俺の顔を見ると、すぐに口を開いた。

「昨日はすまないな…」

はっ？

俺は一瞬自分の耳を疑った。

すまないな…？

謝るのはこっちの方だろう。なにせ俺のふざけた行動でコイツの大切な時間を割いてしまったのだから。

「いきなりお前を突き飛ばしてしまって…」

そんな事で俺に謝ってきたのか！

「い…いいよ、もうそんな事…」

「本当か!？」

曇っていた浩二の顔が太陽の光を受けたように明るくなった。

「それにな、お前は謝る方じゃなくて、感謝される方だろ。俺の命をある意味で救ってくれたんだから」

俺はそう言っつて浩二に頭を下げた。

「ありがとう」

「あ…ああ…」

浩二は初めて人に感謝されたように恥ずかしそうに薄く笑った。

俺達の出会いはあまり人に言えるものではなかったが、俺達は学校生活でじよじよに友情を深めていき、いつしかお互いにとって、なくてはならない大切な存在となった。

そんな浩二が今日、その友人達を助けるため、かけがいのない自分の大切な命を犠牲にして、この世から消えた…



## 第十八章 三時間目？

「う…う…」

俺の後ろで今日子がすすり泣きをする。

「おい、もう泣くのはやめろ、またアイツらがつく。」

奥村がキョロキョロと辺りを見渡しながら言った。

「泣かしてやれよ、奥村」

本当は俺も泣きたかった。だが、こんな時に泣く訳にはいかなかった。泣くのは六時間目が終わって、アイツらとのこの腐れゲームに勝った時だ。

「おい、誰か来たぞ！」

奥村が小声で俺達に伝えた。

「アイツらか…？」

俺は奥村の様に顔を伸ばして辺りを見渡して様子をつかかった。

「あっ！」

この三時間目の始まりで別れた、大崎先生だった。

先生も俺達の姿を認めると、俺達の方へ走りだした。

「よかった、無事で」

俺は今日子を立たせると、先生の所へ向かった。

「おお、君達、無事だったか」

先生は笑った。明らかに作り笑いというのが分かる。

あれ…？

そういえば…舟原先生は…一緒にいたんじゃないかなかったのか…？

「舟原先生は、どうしたんですか？」

今日子がしゃっくり混じりの声で先生に聞いた。先生はそれと聞いて、はあ〜と大きな溜息をついた。

やっぱり…

「…ああ、すまない、それにしても、中島君はどうしたんだ？」

俺と今日子がガックリと頭を下げたので、先生は俺達がなにを伝えなかったのかが分かったようなので、それ以上は浩二について聞いてこなかった。

「あの…やっぱり私達と一緒にいきませんか？やっぱりその方が安全でしょうし…」

今日子がそう先生にいった。

だが浩二は皆と一緒にいたが、それでも死んだ。

「…それじゃいくか…」

先生はそういうと、歩き始めた。どうやら自分が俺達の先頭をいくらしい。

「先生！俺が先頭をいきますよ」

奥村が先生の前に出ようとしたが、先生はそれをさせなかった。

「いっしょ」

俺は今日子の腕を握ると、先にいった二人の後を追った。

俺達四人は校舎の裏口の前に立った。

「開けるぞ」

先生はポケットから鍵を取り出すと、扉の穴に突き刺して回した。

カチャ

小さな金属音が静寂した空気の中に響きわたる。

「…よし…」

俺達は深呼吸をすると、死体の多くなった校舎内へと足を踏み入れるのだった。

## 第十九章 a

「ヨシ…」

中島浩二を人間の形ではなくした後、aはまた再び獲物を探しに出掛け始めた。

aの人生はSCYの入る前はひどくすさんだ物ばかりだった。

学校では醜い顔とその片言の喋り方が元となり、相当のいじめを受けていた。

両親からも過激な虐待を受けており、散々な毎日を送っていた。

そして、十歳になったと同時に彼女は家を飛び出した。

周囲の人々は彼女の醜い顔を見ると、失神したり、嘔吐をしたりした。

そんな中で、顔色一つ変えず、彼女に話しかけてきた者がいた。

SCYへのスカウトマンであった。

彼女はそのスカウトマンの話を聞くと、すぐにSCYに入る事を了解した。こんな事をしなければ生きていけないと思ったからである。

SCYに入った彼女はすぐさま自分の才能に気が付き始めた。

その才能というのは、普通の社会ではとつてい認められないであ  
ろう、犯罪の才能である。

そのため彼女はS C Yでは重宝され、気づけは【a】という、良  
い位に付いていた。

「アッ！」

遠くで女子生徒が走っていくのが見えた。

aは深呼吸をすると、思いつきり地面を蹴った。

A2はアッというまに女子生徒に近づくと、ポンポンと肩を叩い  
た。女子生徒はそれで近づいてきたA2の存在に気が付いたようで、  
逃げようとしたがもう遅い。

aは素早く鞘から日本刀を取り出し、女子生徒の胸に突き刺して、  
ゆっくりと宙に持ち上げた。

日本刀をつたって大量の血がaの手を汚していくが、気にしない。  
後でふけばいいのだ。

日本刀の刃を上になると、女子生徒の体はゆっくりと自分の体を  
裂きながら下に落ちた。

地面に落ちた女子生徒の死体をaは、中島浩二の様に日本刀でグ  
チャグチャに始めた。

## 第二十章 三時間目？

「三時間目終了まであと十分…」

浩二が死んでこの校舎に入った時から今まで、いろんなヤツに追われてきた。

ワイヤーを使う少年…

巨大なブーメランを使う少女…

思えばここまで生きれるヤツの方がおかしく、一、二時間目で死ぬヤツの方が正常なのかもしれない。

「そろそろいくか…」

先生がそうだったので、俺達が再び歩き出そうとした瞬間だった。

ビュッ！

俺の顔の横を何かがかすっていった。

それは垂直に壁に突き刺さった。

それは…矢だった…

「大丈夫か！？」

奥村と先生、今日子が慌てて俺に駆け寄ってくれた。

「もー！アンタなにやってんのよ！」

ゴンツ、という音と高い少女の声の俺の耳に入ってきた。

「アンタ、やるうと思えば頭を打ちぬけたでしょ！」

「ごめん…ちょっと…手が震えて…」

その声がしている方を見ると、頭を押さえている髪の毛の長い半泣き状態の少女と、バットを持っていたいかにも凶悪そうな目をした少女がいた。

「アンタこれだから皆から冷たい目で見られてんのよ…まあ、私がお手本を見せてあげるからちゃんと見てなさい！」

少女はそういうと、両手にバットをもって俺達の方に走り出した。

「逃げる！」

先生が叫び、走り出したので俺達もその後が続いた。

「逃がすか！」

少女はそう叫ぶが、足の速さでいけば俺達の方が上だ。

「散らばって逃げた方がいいんじゃないやありません!？」

とっさの思いつきだったが、逃げるのには効率がいいと思った俺は、皆にいった。



「そうと決まれば…」

俺達はバツと違ういろいろな方向に走り出した。

「クッ！…アイツ…」

バツをもった少女は俺に標準を定めたらしく、俺の方に走ってきた。

殺されて溜まるものか！

それだけを信念に俺はひたすら走り続けた。

俺が階段を下りても少女は俺を追い続ける。

どうにかしてアイツをまく方法はないものか…

そう思った時、近くの教室の扉が開き、一年生位と思われる冥王小学校の男子生徒が出てきた。

その男子生徒も少女が来るのに気付いたらしく、俺と同じ方向を走り出した。

俺は男子生徒を追い抜き、とにかく走り続けた。

走らなければ死ぬ、殺される！

後ろでさつき追い抜いた男子生徒のものかと思われる絶叫が聞こえてきた。少女に追いつかれてまったのだろうか。

よしー！これでしばらくヤツは時間を取られるぞー！

そして俺は、少女の視界から消えた。

## 第二十一章 五分休み？

「やっと…三時間目が終わったか…」

フウツと息を吐き、俺はその場に座り込んだ。

あとアイツらから逃げる時間は135分間か…

俺は残りの生存者の数を見にいった。

俺と今日子、奥村、先生を合わせて残り【342】か…だいぶ減ったものだ。

「三堂！！」

背後で俺を呼ぶ声がしたので振り向くと、奥村と今日子、そして先生がこちらに向かって走ってきた。

よかった…無事で…

「無事でよかったな。怪我はないか？」

「大丈夫ですよ、先生」

「本当に…無事でよかったです…」

皆本当に俺の事を心配してくれていた。そんな彼らの思いを踏みにじらないためにも、きっかり最後まで生きなくてはならない。

「そつだ！そついえば学校の周りに結構の野次馬や警察が来ているから、見にいこうぜ」

他にする事がなかったので、俺達は運動場に出て、学校のフェンス付近にやってきた。

自分の子供の名前を呼ぶ親や、通信機のようなもので誰かと話す警察官などが五十人ほどいた。

「俺達の親は…いないようだな…」

一通り辺りを見渡すと、俺達よりも年下かと思われる姉弟が、フェンスの外にいる大人…おそらく二人の親だろうと話していた。

「いいな、お父さん、お母さんがきてくれていて…それにしても…」

先生が口に手を軽く押して、うつむいた。

「どうして警察がきてくれるのに…どうして私達を助けてくれないんだ？」

たしかに…そついわれてみればそつだ！

「あつ！もうすぐ四時間目が始まるから、校舎の中に入らない？」

今日にそついわれて、俺達は大きな疑問を抱えながら、校舎の中へと入っていくのだった…

## 第二十二章 四時間目？

チャイムが鳴り、四時間目が始まった。

アイツらが今にも物陰から出てきそうなので、俺達は武器を構えながら先に進んだ。

「静かだな…」

たまにドン、ドンという拳銃の音が遠くから聞こえるくらいで、あとはほとんど静寂した感じだった。

俺達が職員室の前まで来た時、先生の足が止まった。

「あっ！ちよっとまってる」

先生はそういうと、俺達を残し、職員室の扉を開け、中に入った。

先生一人では危ないから、俺も中に入ろうと思ったが、やはり自分の命が大切なので、ここは先生一人でいかせる事にした。

しばらくすると、布でできた袋を片手に持って、先生が出てきた。

「ほ」

そうやって先生が取り出したのは、通信機だった。

「もしも三時間目みたいに離れ離れになった時、便利だろ？」

「先生…これは一体？」

俺は思わず先生に聞いた。

「これか？学校の見回りをする警備員さん達が使っているやつだ。こんな非常事態だから使っても 問題にならないだろう？」

「たしかに…コイツは便利だな…」

奥村が通信機の一つを取った。

「ほらっ」

先生が俺と今日子に通信機と説明書かと思われる紙を手渡した。

「それじゃあいこうか」

俺達はなれない通信機をもって、先生の後を追った。

それから十分くらいたった頃だろうか…

再び先生が足を止めた。

「今度は何ですか？」

今日子が少々苛立ったような感じで先生に聞いた。

「何かあそこの部屋から妙な音がしないか？」

先生が指差したのは会議室だった。

「いってみよう」

そういつて先生はズカズカと歩き、何のためらいもなく会議室の扉を開いた。

## 第二十三章 七瀬智子

フウッ…

七瀬智子とその弟は運動場のすみのしげみに隠れていた。

二人はさつき父親とフェンスごしだが、会話ができて心が落ち着いていた。

七瀬姉弟は冥王小学校でも有名な仲のよい姉弟だった。

登校、下校をする時はいつもお互いの手をつないでいた。

もしも弟がイジメツ子にいじめられる事があれば、智子はイジメツ子と弟の間に入り、弟をイジメツ子から守った。

なぜ、お前は弟を守るのか？と、彼女はよく人に聞かれる。

それは、母親との約束を守るためだった。

彼女達の母親は智子が五歳の時にガンでこの世を去った。

その母親が死ぬ間際にいった彼女への一言が智子が弟を守りぬくきっかけとなった。

「お母さんの代わりにあなたがあの子のお母さんになってあげなさい…」



その日以来、彼女は母親の様に弟に接すようになった。

今だって、弟に惨殺された生徒達の死体を見せまいと手で弟の目をふさいでいた。

「おねえちゃん……」

弟の口から低い震えた声が出てきた。

「大丈夫、怖くないから、おねえちゃんが守ってあげるから……」

そういう智子も本当は泣きたくなくなるほど怖かった。

一体今日で何人が目の前で死んで言ったか……

「……い……」

ここで隠れていてもいずれは見つかってしまうと考えた彼女は弟を立てさせてしげみからでた。

「できるだけ目立たないように……」

「ウン」

二人は小さく身をかがめて死体が散らばっている運動場を歩き始めた。

「早く学校の中に入ろうよ……」

「そっだね」

弟にいわれて、智子は足を速めたその時、二人はガクツとうつぶせに倒れた。

な…なに？

するとだんだん足が熱くなってきたので、二人は熱くなってきた足を見た。

「……………！」

ショックで声が出なかった。

二人の量足は血を噴出しながら地面に転がっていたのだ。

「四時間目において大復活だぜ〜！」

ショック状態にある二人の目の前に、血がついたオノを持った少年（P）が近寄ってきた。

「まずこつちを殺ろうか…！」

少年はオノを智子の弟に向けた。

「やめて〜！」

智子は少年の攻撃から弟を守ろうとするも足が無くなっているの  
で飛び掛る事も出来なかった。

「……………！」

弟は悲鳴を上げる間も無く、少年のオノで頭から真っ二つに裂かれた。

「さて…」

少年は舌でオノについた血をベロツとなめて、智子の方に歩みよった。

私は母さんとの約束を守れなかった…

少年がオノを振り上げる。

ゴメンね…

ザシユ！

「もしもあの時、お前達があおのしげみから出なかったら、お前達は最後まで生き残れたかもしれないぜ」

彼はそう言つと、幼い姉弟の死体を残して立ち去つた。

## 第二十四章 四時間目？

「……………！」

余りのおぞましさに声が出なかった。

一人の少女が人の腕をムシヤムシヤと食べていたのだ。

自分の顔に血がビチャビチャと付きながらも、俺達がこの部屋に入ってきて、手を止める事もなく、幸せそうに、美味しそうに食べていた。

「俺達に…気付いてないようだぜ…」

なんて集中力だ…

「出よう…」

俺達は部屋から出て、また廊下を歩き始めた。

「本当にアイツらが分からなくなってきた！」

奥村が歯がゆそうに頭を掻いた。

「臓器を引きずり出したり、人の肉を食べたり…アイツらの親つてのは…」

「いない感じだけ…」

今日子がボソリと口に出した。

「どついう事だ？」

奥村が目を丸くして、今日子に聞いた。

「分からない…けどそんな気がするの…」

俺は今日子の考えに賛同した。

もしもアイツらの親がいたとしたら、その親達は頑張って自分の子供のやるうとしてしている事をなんとしてでも止めるはずだ。

「もうやめよう、そんな話」

先生がいったので、俺達は黙って廊下を歩いた。

俺達が階段まで差し掛かった時、階段の上から、また聞きたくもない可愛らしい声が聞こえてきた。

「また会ったね」

b…

「今度は頭を狙うから…」

ガチャリとbが拳銃を構えた。

## 第二十五章 四時間目？

「いくぞ！」

先生が声を上げ、渡り廊下に飛び出した。その後を奥村、俺、今日子が追う。

パリンッ！

最後に今日子が渡り廊下に飛び出した時、渡り廊下の扉のガラスが割れた。きつとbの撃った弾が当たったのだろう。

「何している！いくぞ！！」

飛び散ったガラスの破片を見つめていた俺は奥村の声でハッと、また走り出した。

弾を避けながら俺達四人は校舎の中に入ると、扉を閉めて内側から鍵を掛けた。

「危なかった…」

今日子がフウッと息を吐いて、壁にもたれかけた。

「今度は一階にいくぞ」

「はい…」

さっきの弾地獄でくたびれていた俺達は余り乗り気ではなかった

が、先生がいうのだからしかたないだろう。

階段を下りて一階に下りた俺達は誰かいないか辺りを見回したが、目に飛び込んでくるものは血や臓器、肉片…（まあこの日で何度も見ているからもう慣れたが）

「生存者はもうほとんどいないかも…」

今日子がそういった瞬間、俺の顔をビュッ！と何かがかすり、血がタラリと落ちた。

「さっきはよくも逃げて…！」

b…もうかぎ付けてきたか！

「逃げろ！」

俺達は一年生の教室がある方向に走り出した。

「今度は逃がさない…」

バンッ

「グギャー！」

弾が先生の耳を撃ち抜いた。顔に血が降りかかる。

「大丈夫…ですか！」

「今はそんな事はどうでもいい！」



俺達は下駄箱の棚に飛び込んだ。

「どうした!?!」

「!?!」

どうやらbの銃声でSCYのメンバーが何人か集まってきたようである。

「ええい!もういい!」

全員が下駄箱の棚から出たとき奥村が叫んで立ち止まった。

「コイツらは俺が食い止める!だから先生達はどこか遠くに逃げてください!」

「だが…お前」

「議論している暇はない!いけ!」

「チツ!」

bと数名のメンバーが下駄箱の棚から飛び出してきたので、俺達三人は奥村を置いて外に出た。

## 第二十六章 奥村昭平

これでいい…

奥村昭平は三人が外に出たのを見ると、バツとやって来たSCYメンバーの方向を向いた。

「拳銃女を合わせて五人つて所か…」

奥村はナイフを取り出し構えると、素早く下駄箱によじ上った。

「上だ！」

バンツ！バンツ！と、弾が連射され、下駄箱に使われている木材が弾け飛ぶ。

「ハツ！よつと！」

奥村は次々と下駄箱を飛び越えると、一番横にある、下駄箱と下駄箱の間に飛び込んだ。

「挟み撃ちだ！」

その言葉と同時に、奥村の左右をSCYのメンバーとb小1が塞いだ。

出来ればコイツは使いたくなかったが…

奥村はナイフを思いつきりb小1に投げた。

「キヤア！」

鋭いナイフの刃がbの拳銃を持っている腕に突き刺さった。

ゴトリと拳銃が落ちると奥村は素早く拳銃を拾い、bのこめかみに銃口を突き付けた。

「1111…」

奥村はbの耳元でそう囁くと、銃口をこめかみに突きつけたままbを連れて歩きだした。又メ又メした生暖かいb血が奥村の手を濡らす。

奥村は壁に背をつけた。

「貴様らさっさと失せろ。でないとコイツの頭を吹き飛ばすぞ」

奥村がそういうと、そこらにいたメンバーが全員立ち止まった。おそらく奥村の言う通りにするかしないか迷っているのだろう。

よし…このままコイツらが消えて…

ドスッ…

「は？」

自身の胸から鋭い痛みが走ったかと思うと、体中から力が抜けて行き、バタリと奥村は床に倒れてしまった。

周りの景色が霞む…

奥村昭平が絶命したのを悟ると、ある人物が教室から出てきた。

「助けてくれてありがとう…A」

「なあに、ただ単に俺はコンクリートの壁を刀で突き刺したただけさ」  
そう言ってハンカチで日本刀の血を拭くと、パチンと鞘に収めた。

「それにしても…」

Aが奥村に目をやった。

「あの連中以外でこういったのをやったのはコイツが初めてだろうな」

「おい…お前、腕は大丈夫か…？」

タラタラと血が垂れているbの腕を見て、mが言った。

「ありがと。平気、掠り傷程度だから」

そう言って奥村の手から拳銃を？ぎ取った。

「しかし、コイツみたいなのはコイツだけじゃないかもしれないな」

ポツリとA1が呟いたため、その場にいたSCYのメンバー全員が彼の方を見た。

「……………なあに、気にするな。いずれこの世を破滅に導く偉大なる犯罪者の卵の勘だ」

そう言ってAは仲間を背を向けて歩いて行った。

「…俺達も行くか…」

メンバーの一人がそう言うと、彼らはまた作業に戻るのであった。

## 第二十七章 昼休み？

「奥村…」

四時間目が終わり、俺達は奥村と別れた下駄箱に着ていた。

「そんな…奥村君まで…酷い…」

今日子が顔を抑えて泣きだした。

奥村は、胸を何かで刺されて死んでいた。

彼が愛用していたナイフは持ち主である奥村の血の中に浸っている。

「奥村君…」

先生が手で奥村の見開いている白い目を静かに閉じさせた。

この日を境で友達になれるかと思ったのに…

俺の心に何か広がって行くのを感じたが、そんな事より、俺達はある事をしなければならぬのを思い出した。

「生存者の数を見にいきませんか？」

先生と今日子は少し黙った後、黙って首を縦に振った。

「もう【189】か…」

「あの子たちは…良心がないのかな」

「良心のある人間にする事じゃないだろう？鈴木さん」

そんな人間が、今も自分達のすぐ近くにいると思うと、俺は吐き気がした。

## 第二十八章 昼休み？

今度は俺達は運動場の中へ入った。

今日子や先生は死体の山の中へは入りたくないと言っていたが、俺はもしかしたらケガを負っているだけであつて、もしかしたら生きているヤツが何人かいるかもしれない。そう考えたわけである。

だが、その思いも空しく、この運動上で倒れているヤツで、生きているヤツは一人もいなかった。

「私達はもうでるよ。この運動上から」

俺はもう少し生きているヤツがいなかどうか調べてみる事にした。

だが、十分程調べてみても、生きているヤツは一人もいなかった。

大量の死体の臭いでさすがに気分が悪くなった俺が、運動場の中から出ようとした時、

「おい、ちよつと君！」

男性がフェンス越しで俺を呼んでいた。

一つ一つしつかりと惨殺された死体を見てきたので、気分が悪くなった俺はあまり人と話したくなかったが、無視する訳にはいかなないので、俺はその男性の話しを聞く事にした。



「…何ですか？」

「あ…もしかして三堂一郎君ですか？私は柴藤あゆみの父ですけども」

俺は男性のその言葉を聞いて思い出した。たしかこの人は授業参観でも何度か見た事がある。たしか柴藤あゆみの父親の柴藤武さんだ。

「すみませんが、娘を知りませんか？」

「そつえば…ほとんど冥王小学校の生徒はほとんど見ていませんね」

おそらく皆どこかに隠れているのだろうが、今思えば変な所に隠れるより、堂々と外を行動した方が俺はいいと思う。

柴藤さんはそれを聞いて一瞬暗い顔になったが、すぐになっこりと笑ってみせた。

「そうですか、わざわざ大変な所をお止めしてすみませんでした」

「ああ…別にいいんですよ」

俺はそう言ってフェンスから離れた。

おそらく、あの人の心は娘の事で潰されかけてしまっているのだろつ。

俺は今日と先生に落ち合うと、近くにあったベンチに腰掛けた。

「警察は外でなにやってんだろっな？」

先生がフェンスの外でピカピカと赤いサイレンを放っているパトカーを睨みつけた。

## 第二十九章 杉下司場井

「まだこうやって見つめ続けてるんですか？」

「俺だって好きで見つめあっている訳じゃない！」

SAT第一部隊長、杉下司場井はフェンス越しから冥王小学校の生徒の惨死体を見ていた。

杉下は小学生の頃、両親に連れられて銀行にいった際、その銀行で、銀行強盗に出くわした。

強盗は、幼い杉下を人質にとり、銀行に立てこもった。

何十分も、何時間も拳銃を自身に向けられた杉下の精神が崩壊しかけた頃に、救いの神達はやって来たのだ。

何かの（おそらくドアからだっただろう）隙間から煙球の様な物が入ってきて、辺りを包んで強盗の注意を引いたからである。

その瞬間、そこからバタバタと何十人かの武装した集団がその強盗を取り押さえ始めたのである。

その集団が、幼い杉下には、子供番組に出てくる正義のヒーローの様に見えたのである。

俺もあのような人達みたいになりたい！

杉下はそう思った思いで懸命に努力し、何時しかこの部隊の隊長

に任命されるほどにもなったのである。

「なんでいつまでたつても突入させてくれないんだ！」

こっちは武装しているし、相手も武装をしているとはいえ、まだ十歳前後のガキどもだ。

溜まりに溜まった怒りをブチ当てる様に杉下は、通信機で上官部の連中に問いかけた。

「なぜ私達を突入させてくれないんですか？」

上官達は少し間を置くと、

「…ヤツらは自分達の事をSCYと名乗っているそうだ」

「SCY…」

それでか…

杉下はその組織の事をよく知っていた。

警察でも、けっこうの位の者にしか伝えられていない、組織である。

「残念だが、私達警察には冥王小学校の生徒や教師達を助け出す事はできない」

それを聞いて、全身の力が抜ける感じがした。

自分一人でも突入したい気分だったが、誰一人救えないまま八つ裂きにされるのがオチだ。

だが…

その代わり、もしも何人かが生き残っていれば、その人達に、自分が知る限りのこの事件を起こした連中の事を話してやろうと思っ  
た。

### 第三十章 五時間目？

「さて…いくか…」

五時間目の始まりのチャイムが鳴って俺達はスツと立ち上がった。

「どこにいく？」

「五時間目は外を中心に行動してみないか？」

別に外で過ごす理由なんてなかったが、その方が何となく安心だ  
と思ったからである。

「中庭は血でドロドロになっているだろうから、アスファルトやコ  
ンクリートで加工されて

いる所を中心に逃げていこう」

「貴様ら二時間目の時はよくもやってくれたな…」

後ろの方で声が出たかと思うと、そこには二時間目に俺が箒を目  
の機械にぶつけた少年だった。

「二時間目の時みたいにかかない事を教えてやる…」

少年は自身の背丈ほどのものあるオノをかまえた。

「にげ…」

俺がそういう前に、またどこからか足音が聞こえてきた。

「あら、まだ隠れてないで外を行動している人がいたなんて…」

今度はブロンドの髪をした眼鏡をかけた少女だった。十中八九コイツもSCYだろう。

「Cか、何しにきた」

自分の獲物が取られると思ったのか、少年は少し苛立った様子で尋ねる。

「別に、実際にやるのも勉強でしょうけど、見るのも勉強でしょう？」

「それじゃあ俺の腕をその目に焼き付けるんだな！」

少年はそう叫んで俺達に飛びかかった。標的に選ばれたのは…俺だった。

「Eが帰ってくるまで俺は【暗闇】という名の恐怖をさまよい続けたんだ！お前にもその恐怖を教えてやるぜ！三堂一郎！！」

俺は少年のオノを避けると、箒をヤツの目に突き出した。

「何度も同じ手が効くかつ！」

少年は顔をグッと横にずらして避けるともういっぱうの手で箒をはたき落とした。箒が地面を滑る。

「フラッ！」

俺は少年のオノを紙一重で避けた。

「今度こそ死ぬがいい！」

少年はオノを置き、今度は小型のオノを二つ取り出した。なぜ…  
重たいオノは使いにくいと判断したのか？それとも…

「投げる気なのか！？」

「…勘がいいようで…」

パワーはあるが、一つ一つの動作が遅い大きなオノなら何とか避けられるが、さすがに高速で飛んでくるオノをかわす自信はなかった。

「今度こそ終わりだ。三堂一郎！」

少年が二つ同時に手からオノを俺に向けて投げつけた。

ここまでかよ…

俺はギョッと目をつぶった。

ドスッ…

そんな音がして、俺の顔や服に、なにか生暖かい物が降り注いだ。



## 第三十一章 柴藤武

「五時間目が始まったか…」

そう呟き、柴藤武はフェンス越しから辺りに鳴り響くチャイムの音を聞いていた。

武が妻からの電話を受け、会社から飛び出して学校に飛んでいったら、もう三時間目になっていた。

武の娘、柴藤あゆみはこの冥王小学校の六年生である。武とその妻が三十代の後半でようやく授かった大切な一人娘である。

武はとにかく娘の安否を知りたかったので、さっきようやく通じかかった娘の同級生に声を掛けてみたが、その同級生は娘の事は知らなかったようだ。

この状態だと…

そう思った瞬間、向こうの一階の渡り廊下の扉が開いて、一人の少女が飛び出した。柴藤あゆみである。

あゆみはなにから逃げているようであった。

良かった…無事で…

だが、そう安心もつかの間である。

あゆみが扉から出てきた数秒後、その扉から大きなヤリを持った

少年（K）が出てきた。服装や持っている物からして冥王小学校の生徒ではないだろう。

「あゆみ！」

武は思わずフェンスをガチャガチャゆすつて娘に向かってそう叫んでいた。

あゆみはその声に気付いたのか、武の方を向いて走り出した。もちろんKもあゆみを殺そうと同じ方向走り出す。

「お前はこっちに来るな！」

武はそう叫んだが、Kはそんな事は気にも止めず、彼は逃げるあゆみとの差を縮めていく。

お願いだ…

武はそう強く念じた。

あゆみが武のいるフェンスまで逃げてきた時、

ドスツ、という、奇妙な音がして、あゆみの胸から銀色の血に染まったヤリの刃が生えていた。

彼の目の前は真っ暗になった。

## 第三十二章 五時間目？

……

痛くない。

もしかしたら、これが死ぬ瞬間なのかもしれない…

浩二や奥村もこんな感じで死んでいったのか…

ドサッ…

俺の前で何かが倒れる様な音がした。

何だ？

俺は恐る恐る目を開いた。

「先生？」

俺の目の前で、先生が倒れていた。胸に二本のオノが刺さっ

る。

オノを持った少年は、鳩が豆鉄砲をくらった感じで、呆然と立ち尽くしていた。

「い…いくぞ！」

いつまでも倒れている先生を見ている訳にもいかなかったので、俺は今日子の腕を掴み、その場から逃げようとした。

「逃がすか！三堂一郎！鈴木今日子！」

地面に置いていたオノを素早く拾って、少年が俺達に襲いかかろうと襲い掛かろうとした時だ。

ドサアッ！

少年がこけた。

別に少年がドジを踏んだ訳ではない。先生の片腕が走り出そうとする少年の足を掴んだからだ。

「痛え…」

顔から派手に地面に突っ込んだので、少年の鼻からは血がポタポタと出ている。そんな少年をこが冷たい目で見つめていた。

ありがとう、先生…

俺は心の中でそう呟いて、今日子をつれて、その場から逃げ出し

た。

### 第三十三章 C

「あーあ、逃げられちゃったわね」

Cはそう呟いて、自分の足を掴んだままの大崎東とそれを外そうとするPとの戦いをまじまじと見つめていた。

この男は懸命に、冥王小学校の生徒達を血祭りにあげているが、彼女は全くやる気はなかった。と言うのも、彼女が人を殺すのは、上から命令を受けた時、または自分が相手を殺さなければ、自分がその相手に殺されるといった時だけであった。

こんなお遊戯位では真の犯罪者は人は殺したりはしない。

そう彼女は思っていた。

そんなCが、なぜこんなゲームに参加したのか。その理由は、このゲームを提案したA1にあった。

AもCと同じ様な考えの持ち主であった。そんな彼がこんな下らないゲームを提案する筈がない。そう思ったCは、そんな彼の心境を調べるために、このゲームに参加したのである。

大崎東は死んで、硬直が始まってしまっているのか、Pがどんなに彼の手を足から外そうとしても、彼の手はいつこうにPの足を掴んで離さなかった。

「あああ……」

外そうとするのに疲れたのか、Pは近くの壁にもたれ掛かった。

「なあC…俺は一生コイツの死体を引きずりながら生きていかなきゃならないのか？」

この低脳め…

「…この人の手を切り落とせばいいじゃない…」

「そ…その手があったか！」

Pは急いで大崎東に刺さっているオノの一本を引き抜いた。

やっと気付いたか…

Cは、まるで親が子供の成長を見守る様な優しい目で、彼を見つめた。



### 第三十四章 五時間目？

俺と今日子はほとんど誰もいなくなった校舎の中に入り、教室の壁にもたれ掛かって座っていた。

隣で今日子が静かに泣いていた。

先生まで死んでしまった…それも、こんな俺を庇って…

「三堂君…」

今日子が俺の方をチラリと見た。

そういえば、俺の服や顔は先生の返り血を浴びて、赤く染まっていたんだっだ。

「今日子、俺ちよつと顔洗ってくるから…」

せめて顔に付いた血だけでも洗い流したいと思った俺は、その場に今日子を置いて顔を洗いにいこうとした。

「ダメ…」

立ち去ろうとする俺の腕を今日子が痛いほど掴んだ。

「怖いよ…」

「……………」

ちょっと考えてみると、こんな状態で今日子一人を置いていく訳にはいかなかった。

俺は我慢して、今日子から離れない事にした。

長い沈黙があった…

「…どうしてなんだろうね…」

いきなり黙っていた今日子が口を開いた。

「どうして人は平気で人を殺せるんだろうね…」

色々と何時間目からか、ヤツらに対して疑問を投げかけていた今日子だったが、今度は本格的に語り始めた。

「殺される人がどんなに悪い事をしていても、その人の命を奪ってもいいなんて事、絶対ないよ。

殺す方も、たとえ誰かのために人を殺したとしても、その誰かは皆が皆その人に「アイツを殺せ」なんて頼んでないだろうし、全然喜ばないだろうと思うよ」

今日子は語り終わると、フツと鼻で笑った。

「ごめんね三堂君、いきなり変な事話し始めて…」

「いいよ、別に…お前はただ単に正しい事を言ったただけだ」

世界中の人間に尋ねて、今日子の言っている事が正しいか、正し

くないか聞けば、全員が正しいとは言わないだろう。

ただ、俺の中では、今日子の言っている事は正しい事であると思  
う。

「それと…三堂君、こんな時に变かもしれないけど私ね…」

「ギヤアアアアア…」

「いじじ」

遠くで悲鳴が聞こえてきたので、俺は今日子を立たせると、他の  
場所にいく事にした。

### 第三十五章 五時間目？

最初の頃、俺達は散らばっている血や肉片、死体をふまない様に歩いていたが、もうここまでくれば、それすらできない位に酷くなっていた。

今日子は俺の手を握り締めたまま、死体等を見ない様に目を伏せていた。

臓器が飛び出した死体を見ても、今の俺はもう、吐き気が込み上げてこなかった。その変わり、さっきの今日子話を聞いて、ヤツらに対する怒りと憎しみが込み上げてきた。

俺達は階段を上がり二階を歩いていると、またもや矢が俺の顔をかすった。俺は矢の飛んできた方を見ると、少し離れた所に、三時間目に出くわした、弓を扱う少女が立っていた。

「さがれ！今日子！」

俺はそれだけを言うと、少女に突進していった。

ろくに人を射れないんだ。俺がこうしても別に大丈夫だろう。

少女はいきなり突進してくる俺に驚いたのか、筒から新たな矢を引き抜くと、弓に引き抜いた矢を込めて、俺に対して狙いを定めた。

手は緊張しているのか、それとも俺を恐れているのか、ガタガタとかなり震えている。

ピュッ！

風を切る音がして、矢が放たれた。

馬鹿め…

放たれた矢は今度は俺にかすりもせず、別の方向に飛んでいった。

矢を放った時、おびえた様に少女の顔がサッと青ざめたが、俺はほとんど気にも留めず、少女に殴りかかった。

ボコッ…

廊下に鈍い音が響く。

「ぎゅっ…」

少女は殴られた顔を抑え、一、二、三步下がると、バツタリとその場に倒れた。

「本当にコイツはこれでも犯罪者なのか？」

俺はすっかり床に伸びてしまっている、少女をチラリと見た。

「ちて…今日子…」

俺はクルリと後ろを向いて、今日子の方を向いた。

### 第三十六章 五時間目？

「…今日子？」

「あ…あ…」

今日子の胸に、矢が綺麗に突き刺さっていた。

…さつき少女が放った、俺には当たらなかった矢だ…

「きよ…今日子！今日子！！」

俺は急いで今日子に駆け寄る。

刺さっていた矢にはかり気を取られていたせいで気付かなかったのだが、今日子の口や鼻からも血がたれている。

今日子は俺が駆け寄ってくると、俺に身を任せるかの様にしてくしゃりと倒れた。

「しっかりしろ、今日子！」

俺は激しく今日子の肩を揺する。

「ガハッ…ガハッ…」

今日子は苦しそくに口から血を吐く。

「三堂…ハア…君…」

今日子が首を上げた。

「私は…ハア…あなたの…ハア…事が…」

「もういい、喋らないでくれ」

今日子が何を言うのかが気になったが、一言一言を言う度に、今日子が苦しそうに息継ぎをするため、俺は今日子の事を気遣ってそう言った。

今日子はなにやら薄い笑みを浮かべると、







絶命した。







### 第三十七章 鈴木今日子

私は三堂一郎君の事が好きだった。

私が彼を好きになったのは、私達がこの学校の四年生になった時だ。

いやだなあ

私は学校に行く足取りが重かった。

私は一週間ほど前からクラスの数人から嫌がらせを受けていた。

教科書やノートやファイルをゴミ箱に捨てられたり、休み時間に呼ばれていつてみたら、その数人が私を取り囲んで「死ね」だの「キモイ」だのといった言葉を360°から浴びせられるのだ。

今思えば当時の私は暗い感じで陰の薄かったためだから、その様ないじめを受けていたのと思う。

ですが、当時の私はなぜ自分がこの様ないじめを受ける理由が分からなかった。

学校に着くと、私をいじめている数人の男女からの、冷たい目線が私を包み込まなかった。

あれ？

私は変だなと思い、自分の机に着いて、恐る恐るその中を見た。

あれれ？

いつもはゴミ箱に入っているはずの私のファイルが、ちゃんと机の中に入っていたのだ。

「……………」

私はしばらくその場に突っ立っていた。

「何で…?」

嫌がらせをされなくなったのは嬉しいが、それもいきなりだったので、私は不思議に思った。

すると、クラスの男子がスウツと私に近づいてきて、私の耳元で言った。

「お前、三堂に感謝しろよ」

「エツ?」

私と三堂君は、ただ単にノートを見せてあげたり見せてもらったり、一緒のグループで活動したりする程度の間柄だった。そんな彼が何を…

「俺、見てたんだよ。」

三堂のヤツがお前をいじめていたヤツらに「今日子をいじめるのはやめる」って言ってたのをさ」



私はすぐに三堂君の所へ向かった。三堂君は今日勉強する所の予習をしている最中だった。

「なんだ？今日子」

彼は私が来たのに気付くと、鉛筆を置いて、自分の体が私の正面を向くように椅子を動かした。

「…三堂君…なんで私をいじめている人達に、いじめをやめさせるように言ったの？」

いじめをしている人に、いじめをやめさせるのは簡単な事ではない。最悪、そのせいで自分にそのいじめの矛先が向くかもしれないのだ。

「なんでって…そりゃあ、俺達友達だろ？」

いじめをやめさせる事で、その矛先が自分に向くかもしれない事は、彼なら絶対に分かっていたはずだ。

それで、私は三堂君が好きになった。

自分の事を気にせずに、私を守ってくれた彼を…

私は三堂君に告白したくても、なかなか切り出せずにいた。

そんなこんなでアツと言う間に二年の月日が経ち、そしてこの殺戮が始まってしまった。

私達は、沢山の犠牲を出しながらもここまでできたが、私もこれでもうおしまいのようだ。

少女が放った矢は、三堂君には当たらず、大きく反れて私の胸にドスツという、鈍い音を立てて突き刺さった。

…胸が熱い…

刺さった所から出ている赤い熱い液体は…私の血？

「きよ…今日子！今日子！！」

三堂君はすばやく私の方に駆け寄ってくれた。

私の体は一気に力を失い、三堂君の体にもたれ掛かるかの様に倒れた。

「しっかりしろ、今日子！」

私の肩を彼は激しく揺する。

もう私は死ぬだろう。

どんどん目が霞んでゆく…

こんな時に言つものじゃないかもしれないが…今逃したら…

「三堂…ハア…君…」

一言一言口に出すのに、胸がキチキチと痛むので、上手く言葉にならない。

「私は…ハア…あなたの…ハア…事が…」

「もういい、喋らないでくれ」

彼の一言で私は口を閉じた。

思いを伝える事は出来なかったけれども、私は最後に彼の優しさに再び触れる事ができた。

それだけで私はうれしかった。

### 第三十八章 五時間目？

今日子まで死んだ…

俺はガツクリと床に膝を着いた。

コツツ…

突然俺の後ろで足音がしたかと思うと、俺の頭にガーンという、物凄い衝撃が走り、俺は横に吹き飛んだ。

誰だ…

俺は殴られて血が垂れているこめかみを押さえて、殴ったヤツの顔を見た。

コイツは…

三時間目の終わりに俺を追っかけまわしてくれた、あの少女だった。バツジにはDと書かれている。

Dはさっき俺が殴り倒した少女を立たせていた。

「ほら、手を貸してあげるから…」

「う…うん…」

少女がそう言った時、Dは俺が起き上がったのに気付き、溜息をついた。

「アンタは起きなくていいのに…」

そう言われた瞬間、自分は今度こそ殺されるかもしれないという、恐怖心が俺を覆った。

ほんの少しの沈黙があって、D再び口を開いた。

「この子…アンタの事が好きだったんじゃない？」

チラリとDは今日子の方を見た。

「どついう事だ？」

思いがけないDの一言に、俺は戸惑った。

「私、少し離れた所でこの子が死ぬのを見てただけど、この子、死ぬ直前にアンタに何か言おうとしていたじゃない」

そうか…

俺は昨日の放課後の事や、ちょっと前の二人だけの教室での事を思い出した。

あの時も今日子は俺に何かを言おうとしていた…

まさか…それが俺に対する告白だったなんて…

俺の両目が熱くなり、そこから生暖かい液体がこぼれた。

「女の子に手を上げたり、心が分からなかったり…アンタって男として最低よね」

そう言って、驚いた事にDは、クルリと背を向けてこの場から立ち去ろうとした。あれっ？

「俺を…殺さないのか？」

「フツ…」

Dは軽く鼻で笑うと、廊下に響く様な大きな声で叫んだ。

「私はね、人を殺すのが楽しいんじゃないの！人を苦しませるのが楽しいの！

早くいくわよ！F！」

Dが歩き始めたため、Fと呼ばれた俺が殴ったて、今日子を殺した少女は、急いで彼女の後を駆け足で追った。

Fがいつてしまったのを見届けると、俺はゆっくりと今日子の亡骸にかがみこんで静かに泣いた。

### 第三十九章 五分休み？

いつの間にか五時間目が終わっていた。

俺は近くにあった水道で、持っているハンカチをぬらした。

ギュツと溜まった水を絞り出して、俺は今日子の所へ向かった。

血が溢れないように、ゆっくりと刺さっている矢を抜いてやる。

そして、ぬらしたハンカチで優しく血で汚れた顔を拭いてやった。

胸に開いた赤い穴さえなければ、誰でも寝ているように思うだろう。

そして、近くの壁に立てかけてやる。

これが、俺が今日子に今出来る最大の供養だろう。

「またな……」

俺はそう言い残し、この場から立ち去った。

運動場に出る。

生存している冥王小学校の人間は、俺を含めて【16】となっていた。

ヒユウと冷たい風が吹く。

長かったような…短かったような…

六時間目、この時間で俺が生き残ろうが死のうが六時間目が終われば全てが終わる。

俺は軽く伸びをすると、学校の中や敷地の中を時間の限り歩きまわった。

俺達の教室。

家庭科室。

体育館。

中庭。

畑。

そしてまた校庭に戻ってしまった。

キーン、コーン、カーン、コーン

六時間目の始まりのチャイムが鳴った。

RPGで言うならば…ラストバトルの始まりだ。



## 第四十章 六時間目？

六時間目が始まった時、物陰から誰かが飛び出してきた。

一時間目に出くわしたハサミの少年である。

「クッ…」

俺は思いつきり地面を蹴って走り出した。

「今度は逃げさせねえ…」

ハサミの少年もそう呟いてハサミを大きく開いて走り出した。

一時間目の時と比べるとかなり足が速くなっている。コイツもあの注射器を使ったのか？

「クソッ！」

俺は自分の足に鞭を打って加速しようとした。

その時、俺の目の前をギューと何かが飛んできた。

それは俺を囲む様に回ると、飛んできた方に戻っていった。

巨大なブーメランである。

このブーメランは四時間目の逃げている途中にも見た事がある。確かこれを使っていたのは、しとかいった、ゴスロリ風の服を着た

ヤツだったっけ…確かあの時はヤツの携帯電話の着信があって、その隙に逃げ出す事が出来たのだ。

「ナイス！L！」

さっきのブーメランで、足が止まってしまった俺は、ハサミの少年に突き飛ばされた。

ハサミの少年は俺を仰向けにし、俺の首を締め付け、小型のハサミを取り出した。

「グチャグチャにしてやる…！」

太陽の光の反射を受け、銀色のハサミが鈍く光る。

俺は両腕に力を入れた。

今ここで死ぬ訳にはいかないのだ！

「てやつ！」

俺はハサミの少年の脇を掴み、思い切り投げ飛ばした。

「うあああああ…」

ハサミの少年は、頭からアスファルトの地面に突っ込み、その場にグツタリと伸びた。

その時、俺の左腕の手首が無くなり、血が噴出した。

飛んできたブーメランが吹き飛ばしたのだ。

「グゾツ！」

素早く起き上がると、俺は校舎の中に転がり込んだ。

## 第四十一章 六時間目？

俺は水道のある場所に向かっていた。

早く止血をしなければ…

右手で押さえてはいるがブシュブシュと血が噴出している。

「早く…早く…」

痛いと言うより熱い…頭がガンガンする…

「アアー!!」

俺は足を速めた。

「フウッ…」

俺はやっとの思いで水道に辿り着いた。

けして遠くにあつた訳ではないのだが、こんな状態ではかなり遠くに感じられてしまう。

俺は血だらけの手で蛇口をひねった。

水がでる。

水は透明。

流れる水に左手を突っ込む。

水は赤く染まる。

「これで…」

そう思った次の瞬間、水道が爆発した。

「グアッ！」

爆風で吹き飛んで、一瞬だけ俺は気が遠くなったが、すぐに立ち直った。

「貴様ら…！」

数メートル向こうで、四人の男女が立っていた。

## 第四十二章 六時間目？

「覚えていてくれたのか…ってまだ数時間しか経ってないけどな」

一人目と二人目は浩二を八つ裂きにしたあの竹ヤリの少年とパチンコの少年、三人目は四時間目に会議室で人の腕を喰らっていた少女、四人目は何か大きな筒の様な物を持った…おそらくコイツが水道を吹き飛ばしたのだらう、始めて見る少年だった。

「残念だったな、出血を止められなくて」

皮肉そうにパチンコの少年が言った。

「まあ…それより…死ね」

パチンコの弾を詰めて、少年がゴムを引いた。

そういえばコイツ…奥村の腕や、浩二の頭を…

俺の体に振るえが走った。

別にコイツを怖れているのではない。

怒りだ。

「怖い？」

人肉を喰らっていた少女の声が耳に入った時、俺はほとんど何も考えずに、パチンコの少年の腹に頭から飛び掛っていた。

「ウツ…」

少年は腹に俺の頭突きを喰らい、少しよろめいた。

「おりゃっ!!」

俺は素早く曲がった体を直すと、今度は回し蹴りをヤツの顔面に喰らわした。

奥村の手や浩二の頭を吹き飛ばした時、さぞかし気分が良かっただろうな!

今度は横の三人が俺に飛び掛ってきた。

流石に片手を失った状態で三人にを相手にするのはキツイので、少女だけを突き飛ばし、俺は彼らから逃げた。

## 第四十三章 六時間目？

「ハア…ハア…」

俺はフラフラと壁によれかかった。

何とか出血は止まったが、今度は物凄い熱さと激痛がしてきた。

頭がおかしくなりそうになる。

奥村：

俺はあのパチンコの少年に片手を吹き飛ばされた奥村の気持ちがよくわかった。

！！！！

俺はすぐさま飛び上がり、扉をブチ破って外に転げ出た。

階段の方から人が降りてくる気配がしたからである。

生存者の人数を考えて、冥王小学校の人間とは到底思えない。

すると向こうも俺の気配を感じたのか素早く階段を下りて、マシンガンの如く拳銃を連発する。

「チクシヨウ！」

俺はまた再び走り出した。



中庭は血でぬかるんで滑りやすいため、俺は血でぬれてはいるものの、硬いアスファルトの上に転がり出た。

俺は体制を整えると、体育館の中に入った。

## 第四十四章 六時間目？

数時間前：ここで全てが始まったのだ。

一番最初に首を切り落とされた男子生徒の死体は、当然の事ながらその場に放置されている。

扉を閉め、俺は急いでステージに飛び乗り、横の階段を駆け上がった。

ダンッ！

体育館の扉が勢い良く開いた。追いつかれたか！

体育館には殆ど使われないが、二階に裏口があるのだ。俺は使った事が無いので開くかどうかは分からないが、一か八か賭けてみるしかない。

俺は裏口の扉の前に来た。

「ひらいてくれよな！」

硬くなっている鍵を開け、ドアのぶをまわした。

開いた。

神は俺に味方してくれのだ。

「よっつっつっしいあああああああ!!」

俺は勢い良く扉をブチ開けた。

「……………ここは…」

俺が出た場所は、中島が三人に惨殺された場所であった。

そういえば、ここに扉があつたっけ…

俺は階段を下りると、物陰から誰かが飛び出してきた。

俺はそいつにはじき飛ばされて、ほとんど肉の塊にやっってしまった中島の死体にビチョツという音を立てて突っ込んでしまった。

俺に突っ込んできた本人は無事だったらしく、気づけばスツ転んだ俺を見下ろして立っていた。

冥王小学校の男子生徒だ。俺より歳下だろうか？

「気をつける。カス」

その男子生徒はそう言い捨て、俺を足のつま先で小突くと、階段を上がり、体育館の中に入っていった。

その中には連中がいるとは知らずに…

「ばーか…」

俺は起き上がった、歩き出した。

## 第四十五章 服部正

服部正は周りを見渡しながらブラブラと外を歩き回っていた。

服部は冥王小学校の五年生…だが、本当は彼はこの学校にはならない人間なのだ。と、いうのも、かれは五年前の入試試験の際、左右、前方の受験者の答案を写してこの学校に入ったのだ。

彼は生まれながら、相当の運の良さを持っていた。

テストでのカンニングや、万引き等を繰り返しても、けしてばれる事はなかった。

この世は運が全てだ。

今回の惨劇も、ほとんど連中に出会う事もなかった。もし出会ってしまっても、周りに他の冥王小学校の生徒を標的にしていたので、今に至るまで彼は掠り傷一つつける事はなかった。

今度は…体育館辺りにいってみるか…

全てが始まった場所で、ヤツらの考えついたゲームを終わらせるのも、気分がいい。

彼は足を速めた。

血溜まりがピチャピチャと音を立てる。

服部は腕時計を見た。

早いものだ…ゲーム終了まで、残り十分…

彼が体育館に着いた時、突然服部の体に、誰かがぶつかった。体がよろける。

ヤツらか…！？

そう思ったのは一瞬だった。

生徒か…

冥王小学校の男子生徒（三堂一郎）だった。彼よりも年上だろう。その生徒はグチヨグチヨになった死体に突っ込んでいた。

「気をつける。カス」

服部はそういって、男子生徒をのつま先で小突くと、その男子生徒が出てきたと思われる体育館の裏口の扉に、吸い寄せられる様に入ってしまった。

体育館の中は思ったより騒がしかった。SCYのメンバーが数人、さっきの男子生徒を追って入ってきたからである。

「そっちにはいたか!？」

「いや、いないよ」

「三堂一郎め!俺様がこの手で肉の塊にしてやる!」

「さつきはよくも投げ飛ばしあがって…」

これは…ヤバイ…

服部はステージのカーテンからこつそりと様子を窺い、入ってきた裏口から出ようとしたが、もう手遅れだった…

「ぐふ！」

細いワイヤーが後ろからまわってきて、彼の首を締めつけたのだ。

「あ…あ…」

彼の体はどんどん上に上がっていく…

何故…どうしてここまで来て…

最初で最後に運に見放された服部正が最後に見たものは、

天井の鉄骨の上で微笑を浮かべながらワイヤーを引き上げている、青みのがかった髪の毛をした少年（m）の姿だった…

## 第四十六章 六時間目？

時間を稼いでくれたであろうあの男子生徒には感謝しなくてはならない。

俺は左右前方を見渡しながらフラフラと歩いていた。

もう、冥王小学校の生徒は俺以外には生き残っていないだろう。

ただ、ここまできたからには絶対に皆の分まで生き残ってやろうと思う。

中島浩二

奥村招平

大崎東先生

鈴木今日子

そして、その他の生徒や先生達…

横のしげみでガサツという音がして、俺の目の前に何かが転がった。

手榴弾…

俺はとっさにその手榴弾を溝に蹴り入れた。



手榴弾が溝の中で爆発したのか、耳の鼓膜が破れないばかりの物凄く音がした。その後に出てくる大量の土煙り…

もしかしたら連中はこの土煙の中から俺を殺す寸法なのかもしれない。

「その手には乗らない！」

俺は土煙を振り払い、思いっきり走り出した。

「クソッ！どこだ！」

俺に手榴弾を転がしてきたヤツも、この土煙で四苦八苦している様だ。

自分でやったくせに…

俺は心の中でそう呟きながらその場を後にした。

近くのしげみの中に入ると、俺は残りの時間と生存者確かめた。

残り時間は…二分！

生存者の人数は…大体予想はしていたが【1】となっていた。要するに、生き残っているのは俺だけだ。

だが、俺が生き残れば、死んだ皆の勝ちにもなる。

よし…残り時間は体中に死体の血でも塗りたくって死んだふりで

そして…

そう思った瞬間、俺の首筋に緑色の何かが押し当てられた。

## 第四十七章 六時間目？

それは日本刀だった。

「珍しいだろう？ 緑色をした刀なんぞ。着色とかしてないんだぜ」

俺の首筋にその日本刀を押し当てたヤツは自慢そうにいった。

この声は…

「A…」

「覚えてくれていた様だな」

最後の最後で…コイツに…嫌だ。

逃げ出そうと思ったが、この少年が出す何かの力が、俺を包み込んで逃がさない…そんな気がした。

本当にここまでか…そう思った時、Aはポケットから何かを取り出して、俺の目の前に差し出した。

十円玉だった。

「フェアじゃない勝負は俺は大嫌いなんでね…こうしようじゃないか。」

コイントスを一回行っつ。

表の面が出たらお前…いや、お前達の勝ち。家にお前を返してやる。

だが、裏の面が出たら俺達の勝ち。俺はお前を殺す…どうだ？」

何故、非道の限りを尽くしたAがいきなりこんな事をするのか、理解不能だったのだが、もう俺にはこれしか生き残る術はない。

俺は黙って頷いた。

「残り時間も少ない…さっさと投げさせてもらう。お前らは何も手を出すなよ！」

見ると、しげみをAの仲間達が取り囲んでいた。気付かなかった…

「いくぞ」

そういつて彼は、十円玉を上投げた。

周りの連中も黙って見守る。

十円玉は、クルクルと宙を舞って…

チャリン…

地面に落ちた。

## 第四十八章 病院

「目が覚めたようね…」

気付いたら俺はベットに寝かされていた。清潔そうな白い部屋…横には父さんと母さんが座っている。何十年かぶりに会った様な気分だ。

「ここはどこ？」

俺は父さんに聞いた。

「病院だよ。それより、具合はどうだ？」

俺は笑ってみせた。

「そうか…」

どれだけの時間眠っていただろうか？

Aが投げた十円玉が落ちたのは何となく覚えている。

父さん達に心配させない様に笑ってみせたが、やっぱり体中が痛い…

だが、今俺はこうして生きている。

勝ったのだ。

あの悪魔の化身どもに…

ガチャ

突然、扉が開き、三十代半ば辺りかと思われるガツチリとした体格の男性が入ってきた。

「あ…どうも…」

父さんと母さんは立ち上がって、その男性に会釈をして、部屋から出ていった。

「具合の方はどうだい？」

男性は穏やかな口調で俺にいった。

「私は杉下司場井。警察関係者の者だ。」

私がここに来たのは、君に話しておきたい事があってね。あの戦場を生き残った君に…」

「話したい事…ですか？」

杉下さんは父さんと母さんの方を向いて、席を外すように伝えた。

父さん達が部屋から出ていくと、杉下さんは椅子に腰掛けた。

「本当は上の命令で、この事は伏せておくようにいわれているんだけど…」

上からの命令…とんでもない機密なのだろうか？

「…それで、僕に伝えたい事ってなんですか？」

杉下さんは息を一度吸い込んでいった。

「君達の通っていた小学校を襲撃して、沢山の命を奪っていったあの子達の事だよ」

俺の背筋にゾワツと何かが走った。それは、あの殺戮の際に味わったものよりも大きなものだった。

「彼らはSCY…正式名は【少年少女 犯罪者 養成施設】のメンバーだ」

「犯罪者…養成施設…」

「親に捨てられたり、預けられたりされた子ども達で構成された犯罪組織だ。彼らはそこで多くの悪を学び、社会へと送り出されていく…」

「それで、危険な連中とはいえ、なぜ警察は学校の外で、僕の友達が殺されていく様を黙って見ていたのですか？」

杉下さんはまた息を吐いて、少し黙ると、再び話し始めた。

「君…漫画は好きかい？」

普通では考えられないような技が沢山出てくる様なバトルが出てくる様なやつ…」

そういう事が…



「要するに、自分達が彼らの使う普通では考えられないような技の餌食になりたくなかったから、僕達を見捨てたんですね！」

俺はバツとベットから起き上がり、杉下さんを睨みつけた。

「…君の気持ちはよく分かる…私達警察は沢山の命を見捨てるという、彼らと同じ位、許されるべきではない事をしてしまった…だから私は今こうやって生き残った君に彼らの正体を話しているのだよ」

「……すみませんでした……」

「別にいいよ」

そう言って、杉下さんは椅子から立ち上がった。

「私が知っているのは全て君に話した。私はこれで失礼させてもらう。」

「この事は、誰にも話さないように」

最後にお大事にと言って、彼は部屋を出て行った。

「SCY…か…」

俺の心の中で何かが少しづつ吹き出てきた。

## 第四十九章 時間割の真相

殺戮が終わった数時間後…

拠点にしていたホテルに戻り、皆と別れて、Aはチェックインしていた自分の部屋に入った。

壁に愛用している日本刀【夏】を立てかける。

部屋を見渡すとベッドの上に、ダンボールが置かれていた。彼には見覚えのない箱だが、何が入っているのか、大体予想は出来た。

そんな…やっぱり…

そう思うと、悲しみがこみ上げてきた。

気を落ち着けようと、床に置いてある小さな冷蔵庫を開け、紙パツクの牛乳を取り出す。ストローを刺して口をつけ、中の液体を一気に吸い上げる。

だが、大好きな牛乳のほのかな甘い味も、彼の次から次へとこみ上げてくる悲しみには敵わなかった。

今度は涙が出てくる。それと同時に、部屋の扉が開いた。

「なんだ？」

急いで涙を拭き、牛乳のパックを机に置いた。

「だった。」

「ちょっと話しがあるんだけど…いい？」

「…どうぞ」

Cは扉を閉め、部屋の明りを点けた。そういえば、点けるのを忘れていたような気がしていた。

彼女はAの顔をまっすぐと見つめていった。

「今日の冥王小学校での件だけど、何故あんな事を提案したの？」

「！」

コイツならもしかしたら、自分が仲間を集め、何故あんな意味のほとんどない殺戮を犯したか、分かってくれるだろうと思っていたが…まさか本当に…

だが、ここはシラを切っておこう。

「最初に話しただろう？」「日頃のストレスを存分に発散させてくれ」  
「って」

「あなたはそんな事で人を殺す様な人間じゃないこと位、ちゃんと分かっています」

「さあ、話して。何故あんな事を提案したの？」

「……………」

Aは黙ってベットの上の箱をしゃくった。

中身を見てみる。という事なのだろう。

Cはベットに歩み寄ると、ポケットからナイフを取り出し、ダンボールの口を閉じているガムテープを切り、箱を開けた。

「これは…」

ダンボールの中には、切断された男性の頭部が入っていた。目は見開き、顔は悲痛に醜く歪んでいる。歳は十代半ば辺りだろうか？

「昔のAだよ…」

Aが涙を堪えるように、小さな声でいった。

「よく剣術や、犯罪者としての心得とかを俺に教えてくれた人だよ。けして優しい人ではなかったけど、俺にとってはかけがいのない存在だった」

彼は壁に立てかけていた【夏】を手に取った。

「コイツも、この人がSCYを出る時に、俺にくれたんだ…」

「私が聞きたいのは、何故あなたがあんな…」

痺れを切らしたCが今にもナイフで切りかかってきそうな勢いだつたので、

「ああ…すまない。話すよ、話す…」

彼はやつと真の理由を話し始めた。

「今から二週間ほど前辺りだったか…俺のもとに一通の手紙と写真が届いたんだ。」

手紙の内容は、冥王小学校の生徒をゲーム形式で一人残らず皆殺しにしろ、さもないとこの男を殺すという内容で、写真には、手足を縛られて、血だらけになったこの人の姿が映っていた」

「…それで？」

「最初は誰か、またはこの人自身の悪戯かと思った。手紙や写真なんか今の技術を使えばなんとでもなる…そう思って、放っておいたんだが…」

Aの暗い声がますます暗くなった。

「数日後…今度はこの人の切断された手首が送られて来た」

「なるほど…それでいてもたってもいられなくなった訳か…でもどうして？」

Aの話しを聞き終えたCがハツとしたようにいった。

「あなたはこの人を救いたかったんでしょ？だけど、なんで最後の三堂一郎の時は、あんな真似をしたの？」

「運に身を任せたんじゃない。神に身を寄せたんだよ」

Aは机に置いてあった牛乳を再び一口飲んだ。

「本当はあのままヤツの首を切り落としてもよかつたんだがな……」

一郎に話しかけた時、振り向いた彼の目を見てAは度肝を抜かれた。

彼の目は、Aが今まで見た事の無い様な目をしていたからである。

まるで何とというか：強いていうなら、今まで数え切れないほどの悪魔や化け物と戦ってきた、勇者の様な……

そんな勇者を、自分の様な知恵のない、腕力だけで生きてきた様な人間が呆気なく殺してしまつていいのだろうか？だが、その勇者を殺さなければ、自分の大切な人が死んでしまう。

そこで彼が考えたのは、あのコイントスである。

周りが見ればただの気まぐれの運任せかもしれないが、彼にとつてはどちらの意が強いかの、神の審判だったのだ。

そして、勝利の審判は、勇者に傾いた。

「……まさかあなたが神にね……」

もう用は無いのだろう。Cはお休みなさいといって、クルリと体の向きを変え、部屋から出ていった。

「俺も、悪魔に命を売つた訳じゃないんでね……」

自分以外、誰もいなくなった部屋で、Aは眩き、ベットに足を運ばせる。

ダンボールの中に入っている先輩の首を取り出し、人差し指と中指で彼の目を閉じさせた。

「すみませんでしたAさん…冥王小の皆さん…」

首を置くと、彼は床にうずくまり、自分の顔を手で覆った。

## エピソード 謝罪

「三堂一郎」

名前を呼ばれ、俺は黙って席から立った。

機械的な足取りで、ステージまで歩み寄る。

今日は冥王小学校の卒業式だ。といつても、本人が出席しているのは生き残った俺とその日、病気や用事で学校に来れなかった者達。

その他は代理人として、彼らの遺影を抱えた両親達である。

そして会場は、学校の体育館ではなく、児童館の体育館を使用して行われた。

あの事件はいくらテレビや新聞を見ても、少しも報道されなかった。やはり杉下さんのいった通り、ヤツらの事は本当に重大な機密だったのだろう。

親達の暗い視線が俺に集まる。

「人殺し！」「お前が代わりに死ねばよかったんだ！」等とは、さすがにいわれなかったが、冷たい視線で見られるよりは、そういうわれた方が俺にとっては、遥かによかった。

階段をゆつくりと上がり、台の前に立った。

「三堂一郎殿。貴方は……」



校長代理はお決まりの言葉を述べると、卒業証書を俺に突き出す。

俺は残った右手でそれを貰い、再び礼をし、ステージを下りるための違う階段の前に立った。

ここで卒業する者は、自分の将来の夢を叫ぶのだ。

俺の夢は…

「僕は、悲惨な事件を起こした悪い人を捕まえたり、悲惨な事件を未然に防いだりする、立派な警察官になりたい！」

体育館全体に響くように、大声で叫んだ。

「本当に、今日の卒業式までに退院できて良かったわね。一郎」

「うん」

卒業式が終わり、俺と母さんは家に帰る近道のため、少し人通りの少ない路地を歩いていった。

あの日の事は、俺に氣遣ってくれたのだろう。母さんと父さんは少しも聞いてこなかった。

「それにしても、まさかあなたが警察官になりたかったなんてねえ」

「まあね…」

本当は政治家辺りにでもなつて、日本だけではなく、世界に貢献出来る仕事に就きたいと思っていたが、あの事件がきっかけで俺はヤツらの様な悪を打ち砕く警察官になりたいと、将来の夢を変更したのだ。

「ちよつと…いいですか？」

背後でいきなり声があったので、俺と母さんは驚いて振り返った。

「…お友達？」

その人物の姿を認めると、小声で母さんは俺に囁く。

「……………先に帰つててくれないかな、母さん」

母さんの姿が見えなくなると、俺はその人物に向かっていった。

「何しに来た…F…」

「それは…」

今日子を射殺した少女は、震える口から、か細い小さな言葉を漏らした。

「…は？」

俺は自分の耳を疑った。

俺が聞いたのは到底、人を殺して逃げた様な人間の口から出る言

葉ではなかったからである。

余りにも信じれなかったので、俺は思わずもう一度いつてくれるようにFに頼んだ。

「…分かりました」

深呼吸をすると、彼女は一回目よりも大きな声でその言葉をいった。

「ごめんなさい…」

「…何かの…冗談か？」

馬鹿な…

こんな事が…

「いえ、私はそんなのをいうためにここへきたんじゃないやありません。ただ…私は自分の犯した罪を少しでも…」

「だったら警察に自首するなり、ナイフを自分の胸に突き刺して自殺するなりしろよ」

そういつて、俺は彼女から離れようとした。それを見たFは急いで俺の前に立ちふさがった。

「警察に自首したら私はいいけど、何故か皆が困ります…それに…」

「？」

「あの日…私初めて人殺しをしたわけじゃないんですよ…」

「…という事は、過去にもお前は殺人を犯したのか…」

F1は黙って頷くと、今度は口元に薄い笑みを浮かべた。

「その度に私は自分の罪を罰するために、自らの命を断とうと思っ  
んですけど、何故か死ぬ  
事が出来ないんですよ。」

首を吊ろうにも、支えの台を蹴る事が出来ない。

睡眠薬を大量に飲んでも、結局は全部吐き出してしまっ…」

薄い笑みが、今度は大らかな笑みに変わった。だが、その彼女の  
目は悲しそうな感じだった。

「本当におかしい話ですよ、一郎さん。  
何十人も人を殺す勇氣はあるのに、その罪を償う勇氣はないなん  
て。」

そうか…

「だからお前は、唯一出来る罪滅ぼしをしに、再び俺の前に姿を現  
したんだな」

Fは黙って頷く。

「だけど…俺に謝った所で、俺は許しても、死んだ今日子や浩二は

お前らの事、許してくれないかもしれないぜ」

「それじゃあ…私はどうしろと？」

「んじゃあ、こうしたらどうだ？」

俺は人差し指を立てて、Fにいった。

「もしも、お前が幽霊とかの存在を信じているんなら、どっかの霊媒師に頼んで、皆の幽霊

を呼び出してもらえばいい。

それで、もしも皆の霊がお前の事を許してくれるのならば、俺もお前の事を許してやる。

だが逆に、皆の霊がお前を許してくれなかった場合は、俺もお前の事を許さない」

病院に入院している際に、何気に見ていたテレビであった、幽霊や宇宙人等を扱った、いかにもやらせ番組の様な番組を思い出していつてみた。

最も、俺はそんな幽霊等の事を信じていない。だが、それを聞いたFの目は、きらきらと輝いていた。（案外こういった話は信じているかもしれない。）

「分かりました。それでは今度、それを霊媒師の方を雇って試してみましよう。

それでは一郎さん。」

Fは俺に向かっておじぎをすると、建物と建物の中の小さな隙間へと入って行き、闇へと消えていった。

Fがいなくなったのを見届けると、俺はさっき自分がFにいった死んだ皆を思い浮かべた。

「お前らなら、許してやるよな…アイツの事…」

そう呟いて、俺はその場を後にした。

## エピソード 謝罪（後書き）

ご愛読ありがとうございました。  
もしも誤字等がありましたら、感想の方に書いてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7824i/>

---

最悪の時間割

2011年7月11日09時12分発行